

新保磐次著

東洋小史 全

東京 金港堂書籍株式會社



緒言

本書は高等女學校及び同程度の女學校東洋歴史の教科用書に充つる目的を以て編纂せり。

本書各節の標目は文部省定むる所の中學校教科細目を基礎として之を節略し、且總べての點より女子に適せしむべく注意せり、本書は極めて必要なる者及び有名なる者の外は成るべく固有名詞の送迎を節儉せりと雖も、地圖には猶多少本文以外の名を存して、隨時敷衍の餘地を存せり。

年代の記憶は第何百年代といふを以て足れりとす。卷末の百年表は此の目的を達するに便益なるを信ず。

本書編纂の材料を得たる普通の書籍は一一之を記せず。最近の圖書には桑原隲藏氏の東洋史、下村三四吉氏の東洋歴史、白河次郎國府種徳二氏の支那文明史、中根淑氏の支那文學史要、古城貞吉

氏の支那文學史、笹川種郎氏の支那文學史、依田雄甫氏の世界讀史地圖等を參考して益を得たること少からず。殊に西域の事に關しては桑原氏の東洋史に由りて旅中調査の勞を省きたること甚だ多し。又本書の地圖挿畫は本社刊行に係る小川銀次郎氏の東洋史略に就きて同氏の承諾を得て轉載したる者多し。著者は是等の先覺に向て深く其の惠を謝す。

明治三十四年十一月

須磨に於て新保磐次

子女東洋小史

目錄

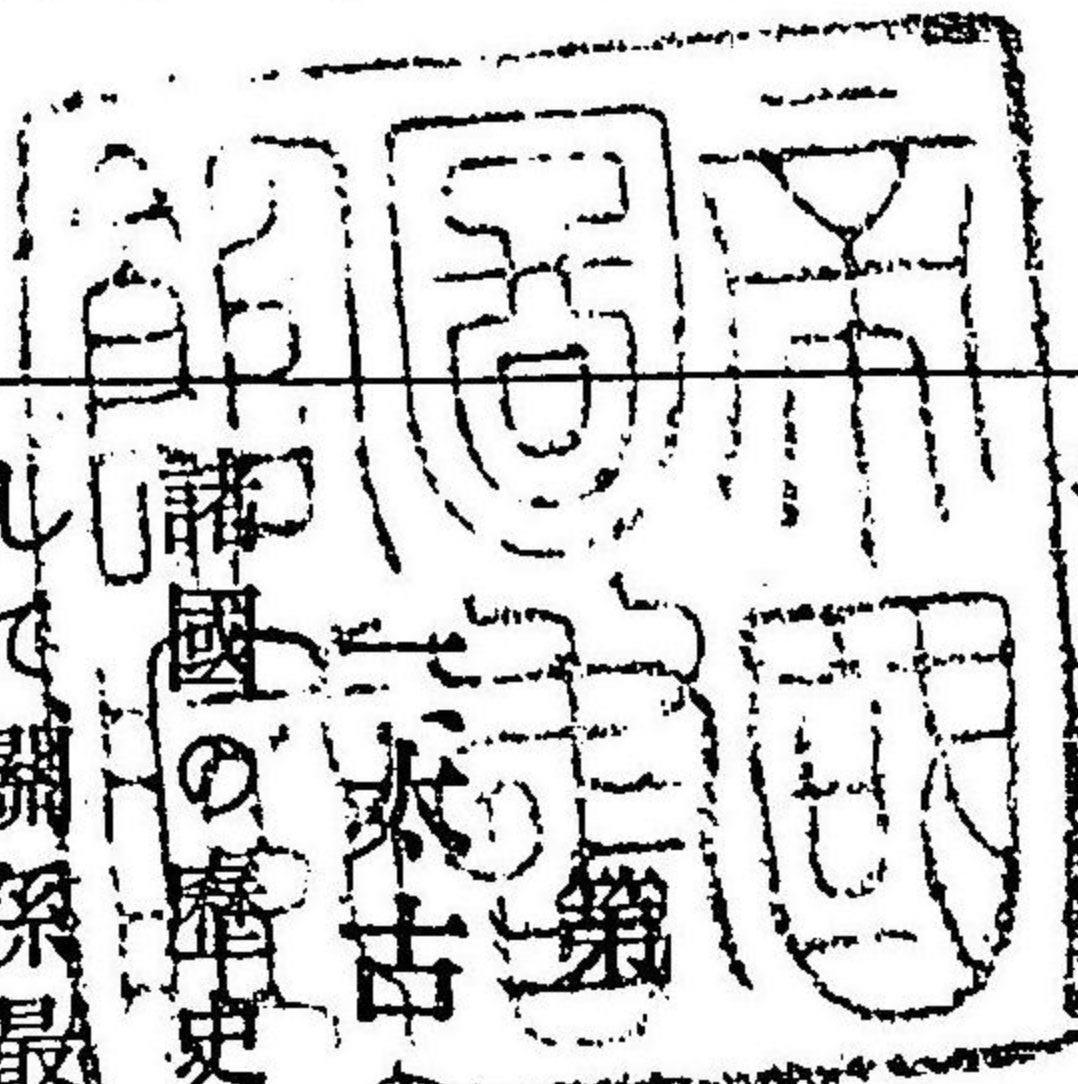
第一章	太古より周まで	一頁
第二章	秦漢及び三國の世	一三
第三章	晉及び南北朝の世	二七
第四章	隋唐の世	三四
第五章	五代及び宋の世	四八
第六章	元明の世	六二
第七章	清の世	七七
歷朝年代略表		九七
百年表		九九

子女東洋小史

新保磐次著

第一章 太古より周まで

太古の支那漢族唐虞三代 東洋史は、東方亞細亞諸國の歴史なり。其の中支那は最も古く最も大なる國にして關係最も大なる故、今支那を主とし、他の諸國を之に副へて記すべし。



漢族

伏羲

神農

黃帝

今より凡そ五千年前に、漢族即ち漢人種西北の方より來りて、支那の黄河の沿岸に移り住み、人口多くなるに隨ひ、數多の部落を立て、各酋長を戴けり。酋長の著しき者は、伏羲始めて漁獵を教へ、神農始めて農業醫藥を教へたり。我が紀元前大凡二千年に、黃帝といへる酋長大に四方を征服し

堯 舜

禹 夏

桀

て一大帝國を建てたり。其の領地は大凡黄河、揚子江の流域にして、歴史にいふ『中原』の地なり。斯くて漢族は漸く中原に繁榮し、歴代支那帝國の主要の地となれり。

其の後帝堯あり、國を唐と號し、仁にして儉約を務め、天下大に治まれり。堯の時、民間に舜といふものあり、父は頑に、母は嚚く、弟の象は傲りて、常に舜を殺さんと圖りしに、舜は孝を以て之を和らげ、彼等をして惡をなすに至らしめざりき。堯其の女を舜に嫁して、天下を讓れり。帝舜立ち、國を虞と號し、能く賢人を用ひて、天下平かなり。

舜の時、禹は水利を治めて大功あり。禹、舜の禪りを受けて王となり、國を夏と號す。禹、飲食衣服を薄くして、力を水利に盡くし、全國衣食すべき地となりぬ。禹の子啓立ち、王位世襲の制始められり。其の子孫桀、王暴虐にして、酒池肉

殷 紂 妲己

周の賢婦人

林の奢りをなし、遂に湯王に亡ぼされぬ。此の時大凡吾が紀元前一千頃なり。

湯王立ち、國を殷と號す。其の子孫紂王奢りを極め、又妲己の言に惑ひ、長夜の宴をなし、殘酷の刑を用ひて、樂みとなし、遂に周の武王に亡ぼされぬ。大凡吾が紀元前五百年なり。後世仁君の例には、堯舜を稱し、暴君の例には、桀紂をいふ。夏、殷、周これを『三代』と稱す。

二、周の盛衰 周は姬姓なり。其の先祖姬棄は舜の時に農師となりて、后稷と稱し、今の陝西省の西安府附近に封ぜられたり。其の子孫農業を勤め、仁政を行ひ、紂の世に至りて、姬昌益徳を修めければ、天下の諸侯多く之に歸服せり。昌の母太任は婦徳甚だ高く、姑周姜に愛まれて、周室の婦となり、昌の妃太姒よく美德を繼ぎて、妬忌の心なく、發、旦等の

文王

賢子を生めり。昌薨じて發立ち、諸侯を率ゐて紂を亡ぼし、天子となる。之を武王となす。昌を謚して文王といひ、且を封じて周公とせり。

武王
長安

武王鎬京に都す、即ち後世の長安の地にして今の西安府に近し。武王大に親族功臣を封じて諸侯となす。諸侯に五等あり、公、侯、伯、子、男といふ、我が國の五爵の名も是より出でたり。

成王

武王崩じて子成王立ちしが、年猶幼かりければ、叔父周公旦攝政せり。周公、成王を輔け、導き、禮儀音楽を製作し、政事教育を勤めければ、周の文化著しく進歩せり。

周公

褒姒

其の後、周の威徳漸く衰へ、幽王に至りて、王后褒姒に惑ひ、無道にして諸侯の怨みを招き、遂に西夷犬戎の爲めに攻殺されぬ。其の子平王に至り、鎬京の西夷に近きを以て遷り

洛陽

周の東遷

春秋

覇者

晉の文公
の夫人

て洛邑に都す、是即ち洛陽にして今の河南省河南府に近し。我が國の洛中、上洛などいふ語も是より出でたり。此の遷都は大凡我が紀元前一百年頃にして、之を周の東遷といふ。
三、春秋戰國の世 周室東遷の後、天子の力諸侯を制すること能はず、因りて有力なる大諸侯の中に、多くの諸侯の長として天子の名を戴きて四方に號令する者起れり、之を覇者といふ。此くの如きこと三百年、之を春秋の世といふ、そは孔子の著はせる春秋に記録せらるるを以てなり。
覇者の治めは齊の桓公にして賢臣管仲を相として國富み、兵強かりき。次は晉の文公なり。文公少き時内亂に由りて齊に奔り、桓公の親族を夫人として安樂に耽る心ありしに、夫人勸めて齊を去らしめ、遂に其の大業を成さしめたり。此の二公と宋の襄公、秦の穆公、楚の莊王とを五覇と稱

戰國

し最も著しき者とす。我が兒島高德の詩にて知られたる越王勾踐も一時覇者と稱したる者なり。是等の覇者の國は大抵一邊に偏れり、即ち齊は東邊、晉は北邊、秦は西邊、楚は南邊、越は東南角に在り、只宋のみ洛邑に近し。春秋の世の末に至りて王室益衰へ、また周の名を戴かんとする者なく、大諸侯は各王號を僭稱して他の小國を併せ、互に割據して勢を争へり。是より後を戰國の世といひ、其の諸侯の強大なるものは秦、楚、齊、燕、趙、韓、魏の七國にして之を戰國の七雄といふ。其の位地をいへば、秦、楚、齊は各元の位地より膨脹し、趙、韓、魏は晉國の分れたるものにして天下の中央に膨脹し、燕は今の直隸より遼東の地方を占めたり。

七雄の中、秦は要害の地を占めて富國強兵天下に敵なく、

蘇秦張儀

日本との比較

孔子

他の六國は只受身にて之を防ぐに過ぎず。されば策士蘇秦は六國を連合して秦に當らしめんとて合従の策を説き、張儀は六國を分離して秦に連合せしめんため連衡の策を説き廻れり。世に蘇秦張儀の辯といふは是より始まれり。斯くて六國或は合従し、或は連衡する間に、秦は益強大に、六國は益衰へ、秦王政後に秦の始皇に至りて周も六國も秦に亡ぼされぬ、此の時我が紀元四百年頃なり。上の時世を我が國に比較するに、東遷以前は王政の世、春秋は覇者即ち幕府の世、戰國は室町幕府が力を失ひし戰國の世に似たり。四、周代の文物、孔子、孟子、春秋の世以後は言論自由の時なりしかば、學者は各己が意見を述べて學術著しく興れり。其の中最も著明にして歴史に關係多きは孔子なり。孔子名は丘、字は仲尼、我が紀元一百年の頃魯國今の山東

孔子



省の中に生まれたり。孔子の目的とする所は仁の一字に在りて、堯舜の道を本とし、文王、武王の法を守り、身を修めて之を天下に及ぼすに在り。論語は孔子の語を録したる者にして我が應神天皇の御時王仁之を持來れり。

孟子は名を軻かといふ、戰國の人なり。孟子の幼かりし時、其の母住居するに鄰を擇び、孟子をして自然に學に志さしめたり。其の後孟子學問半ばにして歸りければ、母は織りかけたる機はたを斷ちて以て中絶を戒めたり。斯くて孟子は遂に大學者となりて孔子の道を推廣めたり。此の傳統の學は即ち儒學にして、支那及び我が國を感化すること多かりき。

孔子の稍先に老子あり、専ら自然を説きて人爲の法式を否みたり。其の徒莊子は孟子と時を同じくせり。其の他

孟子 孟子
孟母
儒學
老子
莊子

字體の變遷

字體變遷の例

兵家に孫子、吳子、法家に韓非子等あり、何れも名文にして後世の文章皆周代のものを法とせり。文字は黃帝の時蒼頡始めて之を作りしと言傳へ、重に物の形を取りし者にして、周の世に其の體を整へて大篆とい

○ 𠄎 𠄏 𠄐 𠄑 𠄒 𠄓 𠄔 𠄕 𠄖 𠄗 𠄘 𠄙 𠄚 𠄛 𠄜 𠄝 𠄞 𠄟 𠄠 𠄡 𠄢 𠄣 𠄤 𠄥 𠄦 𠄧 𠄨 𠄩 𠄪 𠄫 𠄬 𠄭 𠄮 𠄯 𠄰 𠄱 𠄲 𠄳 𠄴 𠄵 𠄶 𠄷 𠄸 𠄹 𠄺 𠄻 𠄼 𠄽 𠄾 𠄿 𠅀 𠅁 𠅂 𠅃 𠅄 𠅅 𠅆 𠅇 𠅈 𠅉 𠅊 𠅋 𠅌 𠅍 𠅎 𠅏 𠅐 𠅑 𠅒 𠅓 𠅔 𠅕 𠅖 𠅗 𠅘 𠅙 𠅚 𠅛 𠅜 𠅝 𠅞 𠅟 𠅠 𠅡 𠅢 𠅣 𠅤 𠅥 𠅦 𠅧 𠅨 𠅩 𠅪 𠅫 𠅬 𠅭 𠅮 𠅯 𠅰 𠅱 𠅲 𠅳 𠅴 𠅵 𠅶 𠅷 𠅸 𠅹 𠅺 𠅻 𠅼 𠅽 𠅾 𠅿 𠆀 𠆁 𠆂 𠆃 𠆄 𠆅 𠆆 𠆇 𠆈 𠆉 𠆊 𠆋 𠆌 𠆍 𠆎 𠆏 𠆐 𠆑 𠆒 𠆓 𠆔 𠆕 𠆖 𠆗 𠆘 𠆙 𠆚 𠆛 𠆜 𠆝 𠆞 𠆟 𠆠 𠆡 𠆢 𠆣 𠆤 𠆥 𠆦 𠆧 𠆨 𠆩 𠆪 𠆫 𠆬 𠆭 𠆮 𠆯 𠆰 𠆱 𠆲 𠆳 𠆴 𠆵 𠆶 𠆷 𠆸 𠆹 𠆺 𠆻 𠆼 𠆽 𠆾 𠆿 𠇀 𠇁 𠇂 𠇃 𠇄 𠇅 𠇆 𠇇 𠇈 𠇉 𠇊 𠇋 𠇌 𠇍 𠇎 𠇏 𠇐 𠇑 𠇒 𠇓 𠇔 𠇕 𠇖 𠇗 𠇘 𠇙 𠇚 𠇛 𠇜 𠇝 𠇞 𠇟 𠇠 𠇡 𠇢 𠇣 𠇤 𠇥 𠇦 𠇧 𠇨 𠇩 𠇪 𠇫 𠇬 𠇭 𠇮 𠇯 𠇰 𠇱 𠇲 𠇳 𠇴 𠇵 𠇶 𠇷 𠇸 𠇹 𠇺 𠇻 𠇼 𠇽 𠇾 𠇿 𠈀 𠈁 𠈂 𠈃 𠈄 𠈅 𠈆 𠈇 𠈈 𠈉 𠈊 𠈋 𠈌 𠈍 𠈎 𠈏 𠈐 𠈑 𠈒 𠈓 𠈔 𠈕 𠈖 𠈗 𠈘 𠈙 𠈚 𠈛 𠈜 𠈝 𠈞 𠈟 𠈠 𠈡 𠈢 𠈣 𠈤 𠈥 𠈦 𠈧 𠈨 𠈩 𠈪 𠈫 𠈬 𠈭 𠈮 𠈯 𠈰 𠈱 𠈲 𠈳 𠈴 𠈵 𠈶 𠈷 𠈸 𠈹 𠈺 𠈻 𠈼 𠈽 𠈾 𠈿 𠉀 𠉁 𠉂 𠉃 𠉄 𠉅 𠉆 𠉇 𠉈 𠉉 𠉊 𠉋 𠉌 𠉍 𠉎 𠉏 𠉐 𠉑 𠉒 𠉓 𠉔 𠉕 𠉖 𠉗 𠉘 𠉙 𠉚 𠉛 𠉜 𠉝 𠉞 𠉟 𠉠 𠉡 𠉢 𠉣 𠉤 𠉥 𠉦 𠉧 𠉨 𠉩 𠉪 𠉫 𠉬 𠉭 𠉮 𠉯 𠉰 𠉱 𠉲 𠉳 𠉴 𠉵 𠉶 𠉷 𠉸 𠉹 𠉺 𠉻 𠉼 𠉽 𠉾 𠉿 𠊀 𠊁 𠊂 𠊃 𠊄 𠊅 𠊆 𠊇 𠊈 𠊉 𠊊 𠊋 𠊌 𠊍 𠊎 𠊏 𠊐 𠊑 𠊒 𠊓 𠊔 𠊕 𠊖 𠊗 𠊘 𠊙 𠊚 𠊛 𠊜 𠊝 𠊞 𠊟 𠊠 𠊡 𠊢 𠊣 𠊤 𠊥 𠊦 𠊧 𠊨 𠊩 𠊪 𠊫 𠊬 𠊭 𠊮 𠊯 𠊰 𠊱 𠊲 𠊳 𠊴 𠊵 𠊶 𠊷 𠊸 𠊹 𠊺 𠊻 𠊼 𠊽 𠊾 𠊿 𠋀 𠋁 𠋂 𠋃 𠋄 𠋅 𠋆 𠋇 𠋈 𠋉 𠋊 𠋋 𠋌 𠋍 𠋎 𠋏 𠋐 𠋑 𠋒 𠋓 𠋔 𠋕 𠋖 𠋗 𠋘 𠋙 𠋚 𠋛 𠋜 𠋝 𠋞 𠋟 𠋠 𠋡 𠋢 𠋣 𠋤 𠋥 𠋦 𠋧 𠋨 𠋩 𠋪 𠋫 𠋬 𠋭 𠋮 𠋯 𠋰 𠋱 𠋲 𠋳 𠋴 𠋵 𠋶 𠋷 𠋸 𠋹 𠋺 𠋻 𠋼 𠋽 𠋾 𠋿 𠌀 𠌁 𠌂 𠌃 𠌄 𠌅 𠌆 𠌇 𠌈 𠌉 𠌊 𠌋 𠌌 𠌍 𠌎 𠌏 𠌐 𠌑 𠌒 𠌓 𠌔 𠌕 𠌖 𠌗 𠌘 𠌙 𠌚 𠌛 𠌜 𠌝 𠌞 𠌟 𠌠 𠌡 𠌢 𠌣 𠌤 𠌥 𠌦 𠌧 𠌨 𠌩 𠌪 𠌫 𠌬 𠌭 𠌮 𠌯 𠌰 𠌱 𠌲 𠌳 𠌴 𠌵 𠌶 𠌷 𠌸 𠌹 𠌺 𠌻 𠌼 𠌽 𠌾 𠌿 𠍀 𠍁 𠍂 𠍃 𠍄 𠍅 𠍆 𠍇 𠍈 𠍉 𠍊 𠍋 𠍌 𠍍 𠍎 𠍏 𠍐 𠍑 𠍒 𠍓 𠍔 𠍕 𠍖 𠍗 𠍘 𠍙 𠍚 𠍛 𠍜 𠍝 𠍞 𠍟 𠍠 𠍡 𠍢 𠍣 𠍤 𠍥 𠍦 𠍧 𠍨 𠍩 𠍪 𠍫 𠍬 𠍭 𠍮 𠍯 𠍰 𠍱 𠍲 𠍳 𠍴 𠍵 𠍶 𠍷 𠍸 𠍹 𠍺 𠍻 𠍼 𠍽 𠍾 𠍿 𠎀 𠎁 𠎂 𠎃 𠎄 𠎅 𠎆 𠎇 𠎈 𠎉 𠎊 𠎋 𠎌 𠎍 𠎎 𠎏 𠎐 𠎑 𠎒 𠎓 𠎔 𠎕 𠎖 𠎗 𠎘 𠎙 𠎚 𠎛 𠎜 𠎝 𠎞 𠎟 𠎠 𠎡 𠎢 𠎣 𠎤 𠎥 𠎦 𠎧 𠎨 𠎩 𠎪 𠎫 𠎬 𠎭 𠎮 𠎯 𠎰 𠎱 𠎲 𠎳 𠎴 𠎵 𠎶 𠎷 𠎸 𠎹 𠎺 𠎻 𠎼 𠎽 𠎾 𠎿 𠏀 𠏁 𠏂 𠏃 𠏄 𠏅 𠏆 𠏇 𠏈 𠏉 𠏊 𠏋 𠏌 𠏍 𠏎 𠏏 𠏐 𠏑 𠏒 𠏓 𠏔 𠏕 𠏖 𠏗 𠏘 𠏙 𠏚 𠏛 𠏜 𠏝 𠏞 𠏟 𠏠 𠏡 𠏢 𠏣 𠏤 𠏥 𠏦 𠏧 𠏨 𠏩 𠏪 𠏫 𠏬 𠏭 𠏮 𠏯 𠏰 𠏱 𠏲 𠏳 𠏴 𠏵 𠏶 𠏷 𠏸 𠏹 𠏺 𠏻 𠏼 𠏽 𠏾 𠏿 𠐀 𠐁 𠐂 𠐃 𠐄 𠐅 𠐆 𠐇 𠐈 𠐉 𠐊 𠐋 𠐌 𠐍 𠐎 𠐏 𠐐 𠐑 𠐒 𠐓 𠐔 𠐕 𠐖 𠐗 𠐘 𠐙 𠐚 𠐛 𠐜 𠐝 𠐞 𠐟 𠐠 𠐡 𠐢 𠐣 𠐤 𠐥 𠐦 𠐧 𠐨 𠐩 𠐪 𠐫 𠐬 𠐭 𠐮 𠐯 𠐰 𠐱 𠐲 𠐳 𠐴 𠐵 𠐶 𠐷 𠐸 𠐹 𠐺 𠐻 𠐼 𠐽 𠐾 𠐿 𠑀 𠑁 𠑂 𠑃 𠑄 𠑅 𠑆 𠑇 𠑈 𠑉 𠑊 𠑋 𠑌 𠑍 𠑎 𠑏 𠑐 𠑑 𠑒 𠑓 𠑔 𠑕 𠑖 𠑗 𠑘 𠑙 𠑚 𠑛 𠑜 𠑝 𠑞 𠑟 𠑠 𠑡 𠑢 𠑣 𠑤 𠑥 𠑦 𠑧 𠑨 𠑩 𠑪 𠑫 𠑬 𠑭 𠑮 𠑯 𠑰 𠑱 𠑲 𠑳 𠑴 𠑵 𠑶 𠑷 𠑸 𠑹 𠑺 𠑻 𠑼 𠑽 𠑾 𠑿 𠒀 𠒁 𠒂 𠒃 𠒄 𠒅 𠒆 𠒇 𠒈 𠒉 𠒊 𠒋 𠒌 𠒍 𠒎 𠒏 𠒐 𠒑 𠒒 𠒓 𠒔 𠒕 𠒖 𠒗 𠒘 𠒙 𠒚 𠒛 𠒜 𠒝 𠒞 𠒟 𠒠 𠒡 𠒢 𠒣 𠒤 𠒥 𠒦 𠒧 𠒨 𠒩 𠒪 𠒫 𠒬 𠒭 𠒮 𠒯 𠒰 𠒱 𠒲 𠒳 𠒴 𠒵 𠒶 𠒷 𠒸 𠒹 𠒺 𠒻 𠒼 𠒽 𠒾 𠒿 𠓀 𠓁 𠓂 𠓃 𠓄 𠓅 𠓆 𠓇 𠓈 𠓉 𠓊 𠓋 𠓌 𠓍 𠓎 𠓏 𠓐 𠓑 𠓒 𠓓 𠓔 𠓕 𠓖 𠓗 𠓘 𠓙 𠓚 𠓛 𠓜 𠓝 𠓞 𠓟 𠓠 𠓡 𠓢 𠓣 𠓤 𠓥 𠓦 𠓧 𠓨 𠓩 𠓪 𠓫 𠓬 𠓭 𠓮 𠓯 𠓰 𠓱 𠓲 𠓳 𠓴 𠓵 𠓶 𠓷 𠓸 𠓹 𠓺 𠓻 𠓼 𠓽 𠓾 𠓿 𠔀 𠔁 𠔂 𠔃 𠔄 𠔅 𠔆 𠔇 𠔈 𠔉 𠔊 𠔋 𠔌 𠔍 𠔎 𠔏 𠔐 𠔑 𠔒 𠔓 𠔔 𠔕 𠔖 𠔗 𠔘 𠔙 𠔚 𠔛 𠔜 𠔝 𠔞 𠔟 𠔠 𠔡 𠔢 𠔣 𠔤 𠔥 𠔦 𠔧 𠔨 𠔩 𠔪 𠔫 𠔬 𠔭 𠔮 𠔯 𠔰 𠔱 𠔲 𠔳 𠔴 𠔵 𠔶 𠔷 𠔸 𠔹 𠔺 𠔻 𠔼 𠔽 𠔾 𠔿 𠕀 𠕁 𠕂 𠕃 𠕄 𠕅 𠕆 𠕇 𠕈 𠕉 𠕊 𠕋 𠕌 𠕍 𠕎 𠕏 𠕐 𠕑 𠕒 𠕓 𠕔 𠕕 𠕖 𠕗 𠕘 𠕙 𠕚 𠕛 𠕜 𠕝 𠕞 𠕟 𠕠 𠕡 𠕢 𠕣 𠕤 𠕥 𠕦 𠕧 𠕨 𠕩 𠕪 𠕫 𠕬 𠕭 𠕮 𠕯 𠕰 𠕱 𠕲 𠕳 𠕴 𠕵 𠕶 𠕷 𠕸 𠕹 𠕺 𠕻 𠕼 𠕽 𠕾 𠕿 𠖀 𠖁 𠖂 𠖃 𠖄 𠖅 𠖆 𠖇 𠖈 𠖉 𠖊 𠖋 𠖌 𠖍 𠖎 𠖏 𠖐 𠖑 𠖒 𠖓 𠖔 𠖕 𠖖 𠖗 𠖘 𠖙 𠖚 𠖛 𠖜 𠖝 𠖞 𠖟 𠖠 𠖡 𠖢 𠖣 𠖤 𠖥 𠖦 𠖧 𠖨 𠖩 𠖪 𠖫 𠖬 𠖭 𠖮 𠖯 𠖰 𠖱 𠖲 𠖳 𠖴 𠖵 𠖶 𠖷 𠖸 𠖹 𠖺 𠖻 𠖼 𠖽 𠖾 𠖿 𠗀 𠗁 𠗂 𠗃 𠗄 𠗅 𠗆 𠗇 𠗈 𠗉 𠗊 𠗋 𠗌 𠗍 𠗎 𠗏 𠗐 𠗑 𠗒 𠗓 𠗔 𠗕 𠗖 𠗗 𠗘 𠗙 𠗚 𠗛 𠗜 𠗝 𠗞 𠗟 𠗠 𠗡 𠗢 𠗣 𠗤 𠗥 𠗦 𠗧 𠗨 𠗩 𠗪 𠗫 𠗬 𠗭 𠗮 𠗯 𠗰 𠗱 𠗲 𠗳 𠗴 𠗵 𠗶 𠗷 𠗸 𠗹 𠗺 𠗻 𠗼 𠗽 𠗾 𠗿 𠘀 𠘁 𠘂 𠘃 𠘄 𠘅 𠘆 𠘇 𠘈 𠘉 𠘊 𠘋 𠘌 𠘍 𠘎 𠘏 𠘐 𠘑 𠘒 𠘓 𠘔 𠘕 𠘖 𠘗 𠘘 𠘙 𠘚 𠘛 𠘜 𠘝 𠘞 𠘟 𠘠 𠘡 𠘢 𠘣 𠘤 𠘥 𠘦 𠘧 𠘨 𠘩 𠘪 𠘫 𠘬 𠘭 𠘮 𠘯 𠘰 𠘱 𠘲 𠘳 𠘴 𠘵 𠘶 𠘷 𠘸 𠘹 𠘺 𠘻 𠘼 𠘽 𠘾 𠘿 𠙀 𠙁 𠙂 𠙃 𠙄 𠙅 𠙆 𠙇 𠙈 𠙉 𠙊 𠙋 𠙌 𠙍 𠙎 𠙏 𠙐 𠙑 𠙒 𠙓 𠙔 𠙕 𠙖 𠙗 𠙘 𠙙 𠙚 𠙛 𠙜 𠙝 𠙞 𠙟 𠙠 𠙡 𠙢 𠙣 𠙤 𠙥 𠙦 𠙧 𠙨 𠙩 𠙪 𠙫 𠙬 𠙭 𠙮 𠙯 𠙰 𠙱 𠙲 𠙳 𠙴 𠙵 𠙶 𠙷 𠙸 𠙹 𠙺 𠙻 𠙼 𠙽 𠙾 𠙿 𠚀 𠚁 𠚂 𠚃 𠚄 𠚅 𠚆 𠚇 𠚈 𠚉 𠚊 𠚋 𠚌 𠚍 𠚎 𠚏 𠚐 𠚑 𠚒 𠚓 𠚔 𠚕 𠚖 𠚗 𠚘 𠚙 𠚚 𠚛 𠚜 𠚝 𠚞 𠚟 𠚠 𠚡 𠚢 𠚣 𠚤 𠚥 𠚦 𠚧 𠚨 𠚩 𠚪 𠚫 𠚬 𠚭 𠚮 𠚯 𠚰 𠚱 𠚲 𠚳 𠚴 𠚵 𠚶 𠚷 𠚸 𠚹 𠚺 𠚻 𠚼 𠚽 𠚾 𠚿 𠛀 𠛁 𠛂 𠛃 𠛄 𠛅 𠛆 𠛇 𠛈 𠛉 𠛊 𠛋 𠛌 𠛍 𠛎 𠛏 𠛐 𠛑 𠛒 𠛓 𠛔 𠛕 𠛖 𠛗 𠛘 𠛙 𠛚 𠛛 𠛜 𠛝 𠛞 𠛟 𠛠 𠛡 𠛢 𠛣 𠛤 𠛥 𠛦 𠛧 𠛨 𠛩 𠛪 𠛫 𠛬 𠛭 𠛮 𠛯 𠛰 𠛱 𠛲 𠛳 𠛴 𠛵 𠛶 𠛷 𠛸 𠛹 𠛺 𠛻 𠛼 𠛽 𠛾 𠛿 𠜀 𠜁 𠜂 𠜃 𠜄 𠜅 𠜆 𠜇 𠜈 𠜉 𠜊 𠜋 𠜌 𠜍 𠜎 𠜏 𠜐 𠜑 𠜒 𠜓 𠜔 𠜕 𠜖 𠜗 𠜘 𠜙 𠜚 𠜛 𠜜 𠜝 𠜞 𠜟 𠜠 𠜡 𠜢 𠜣 𠜤 𠜥 𠜦 𠜧 𠜨 𠜩 𠜪 𠜫 𠜬 𠜭 𠜮 𠜯 𠜰 𠜱 𠜲 𠜳 𠜴 𠜵 𠜶 𠜷 𠜸 𠜹 𠜺 𠜻 𠜼 𠜽 𠜾 𠜿 𠝀 𠝁 𠝂 𠝃 𠝄 𠝅 𠝆 𠝇 𠝈 𠝉 𠝊 𠝋 𠝌 𠝍 𠝎 𠝏 𠝐 𠝑 𠝒 𠝓 𠝔 𠝕 𠝖 𠝗 𠝘 𠝙 𠝚 𠝛 𠝜 𠝝 𠝞 𠝟 𠝠 𠝡 𠝢 𠝣 𠝤 𠝥 𠝦 𠝧 𠝨 𠝩 𠝪 𠝫 𠝬 𠝭 𠝮 𠝯 𠝰 𠝱 𠝲 𠝳 𠝴 𠝵 𠝶 𠝷 𠝸 𠝹 𠝺 𠝻 𠝼 𠝽 𠝾 𠝿 𠞀 𠞁 𠞂 𠞃 𠞄 𠞅 𠞆 𠞇 𠞈 𠞉 𠞊 𠞋 𠞌 𠞍 𠞎 𠞏 𠞐 𠞑 𠞒 𠞓 𠞔 𠞕 𠞖 𠞗 𠞘 𠞙 𠞚 𠞛 𠞜 𠞝 𠞞 𠞟 𠞠 𠞡 𠞢 𠞣 𠞤 𠞥 𠞦 𠞧 𠞨 𠞩 𠞪 𠞫 𠞬 𠞭 𠞮 𠞯 𠞰 𠞱 𠞲 𠞳 𠞴 𠞵 𠞶 𠞷 𠞸 𠞹 𠞺 𠞻 𠞼 𠞽 𠞾 𠞿 𠟀 𠟁 𠟂 𠟃 𠟄 𠟅 𠟆 𠟇 𠟈 𠟉 𠟊 𠟋 𠟌 𠟍 𠟎 𠟏 𠟐 𠟑 𠟒 𠟓 𠟔 𠟕 𠟖 𠟗 𠟘 𠟙 𠟚 𠟛 𠟜 𠟝 𠟞 𠟟 𠟠 𠟡 𠟢 𠟣 𠟤 𠟥 𠟦 𠟧 𠟨 𠟩 𠟪 𠟫 𠟬 𠟭 𠟮 𠟯 𠟰 𠟱 𠟲 𠟳 𠟴 𠟵 𠟶 𠟷 𠟸 𠟹 𠟺 𠟻 𠟼 𠟽 𠟾 𠟿 𠠀 𠠁 𠠂 𠠃 𠠄 𠠅 𠠆 𠠇 𠠈 𠠉 𠠊 𠠋 𠠌 𠠍 𠠎 𠠏 𠠐 𠠑 𠠒 𠠓 𠠔 𠠕 𠠖 𠠗 𠠘 𠠙 𠠚 𠠛 𠠜 𠠝 𠠞 𠠟 𠠠 𠠡 𠠢 𠠣 𠠤 𠠥 𠠦 𠠧 𠠨 𠠩 𠠪 𠠫 𠠬 𠠭 𠠮 𠠯 𠠰 𠠱 𠠲 𠠳 𠠴 𠠵 𠠶 𠠷 𠠸 𠠹 𠠺 𠠻 𠠼 𠠽 𠠾 𠠿 𠡀 𠡁 𠡂 𠡃 𠡄 𠡅 𠡆 𠡇 𠡈 𠡉 𠡊 𠡋 𠡌 𠡍 𠡎 𠡏 𠡐 𠡑 𠡒 𠡓 𠡔 𠡕 𠡖 𠡗 𠡘 𠡙 𠡚 𠡛 𠡜 𠡝 𠡞 𠡟 𠡠 𠡡 𠡢 𠡣 𠡤 𠡥 𠡦 𠡧 𠡨 𠡩 𠡪 𠡫 𠡬 𠡭 𠡮 𠡯 𠡰 𠡱 𠡲 𠡳 𠡴 𠡵 𠡶 𠡷 𠡸 𠡹 𠡺 𠡻 𠡼 𠡽 𠡾 𠡿 𠢀 𠢁 𠢂 𠢃 𠢄 𠢅 𠢆 𠢇 𠢈 𠢉 𠢊 𠢋 𠢌 𠢍 𠢎 𠢏 𠢐 𠢑 𠢒 𠢓 𠢔 𠢕 𠢖 𠢗 𠢘 𠢙 𠢚 𠢛 𠢜 𠢝 𠢞 𠢟 𠢠 𠢡 𠢢 𠢣 𠢤 𠢥 𠢦 𠢧 𠢨 𠢩 𠢪 𠢫 𠢬 𠢭 𠢮 𠢯 𠢰 𠢱 𠢲 𠢳 𠢴 𠢵 𠢶 𠢷 𠢸 𠢹 𠢺 𠢻 𠢼 𠢽 𠢾 𠢿 𠣀 𠣁 𠣂 𠣃 𠣄 𠣅 𠣆 𠣇 𠣈 𠣉 𠣊 𠣋 𠣌 𠣍 𠣎 𠣏 𠣐 𠣑 𠣒 𠣓 𠣔 𠣕 𠣖 𠣗 𠣘 𠣙 𠣚 𠣛 𠣜 𠣝 𠣞 𠣟 𠣠 𠣡 𠣢 𠣣 𠣤 𠣥 𠣦 𠣧 𠣨 𠣩 𠣪 𠣫 𠣬 𠣭 𠣮 𠣯 𠣰 𠣱 𠣲 𠣳 𠣴 𠣵 𠣶 𠣷 𠣸 𠣹 𠣺 𠣻 𠣼 𠣽 𠣾 𠣿 𠤀 𠤁 𠤂 𠤃 𠤄 𠤅 𠤆 𠤇 𠤈 𠤉 𠤊 𠤋 𠤌 𠤍 𠤎 𠤏 𠤐 𠤑 𠤒 𠤓 𠤔 𠤕 𠤖 𠤗 𠤘 𠤙 𠤚 𠤛 𠤜 𠤝 𠤞 𠤟 𠤠 𠤡 𠤢 𠤣 𠤤 𠤥 𠤦 𠤧 𠤨 𠤩 𠤪 𠤫 𠤬 𠤭 𠤮 𠤯 𠤰 𠤱 𠤲 𠤳 𠤴 𠤵 𠤶 𠤷 𠤸 𠤹 𠤺 𠤻 𠤼 𠤽 𠤾 𠤿 𠥀 𠥁 𠥂 𠥃 𠥄 𠥅 𠥆 𠥇 𠥈 𠥉 𠥊 𠥋 𠥌 𠥍 𠥎 𠥏 𠥐 𠥑 𠥒 𠥓 𠥔 𠥕 𠥖 𠥗 𠥘 𠥙 𠥚 𠥛 𠥜 𠥝 𠥞 𠥟 𠥠 𠥡 𠥢 𠥣 𠥤 𠥥 𠥦 𠥧 𠥨 𠥩 𠥪 𠥫 𠥬 𠥭 𠥮 𠥯 𠥰 𠥱 𠥲 𠥳 𠥴 𠥵 𠥶 𠥷 𠥸 𠥹 𠥺 𠥻 𠥼 𠥽 𠥾 𠥿 𠦀 𠦁 𠦂 𠦃 𠦄 𠦅 𠦆 𠦇 𠦈 𠦉 𠦊 𠦋 𠦌 𠦍 𠦎 𠦏 𠦐 𠦑 𠦒 𠦓 𠦔 𠦕 𠦖 𠦗 𠦘 𠦙 𠦚 𠦛 𠦜 𠦝 𠦞 𠦟 𠦠 𠦡 𠦢 𠦣 𠦤 𠦥 𠦦 𠦧 𠦨 𠦩 𠦪 𠦫 𠦬 𠦭 𠦮 𠦯 𠦰 𠦱 𠦲 𠦳 𠦴 𠦵 𠦶 𠦷 𠦸 𠦹 𠦺 𠦻 𠦼 𠦽 𠦾 𠦿 𠧀 𠧁 𠧂 𠧃 𠧄 𠧅 𠧆 𠧇 𠧈 𠧉 𠧊 𠧋 𠧌 𠧍 𠧎 𠧏 𠧐 𠧑 𠧒 𠧓 𠧔 𠧕 𠧖 𠧗 𠧘 𠧙 𠧚 𠧛 𠧜 𠧝 𠧞 𠧟 𠧠 𠧡 𠧢 𠧣 𠧤 𠧥 𠧦 𠧧 𠧨 𠧩 𠧪 𠧫 𠧬 𠧭 𠧮 𠧯 𠧰 𠧱 𠧲 𠧳 𠧴 𠧵 𠧶 𠧷 𠧸 𠧹 𠧺 𠧻 𠧼 𠧽 𠧾 𠧿 𠨀 𠨁 𠨂 𠨃 𠨄 𠨅 𠨆 𠨇 𠨈 𠨉 𠨊 𠨋 𠨌 𠨍 𠨎 𠨏 𠨐 𠨑 𠨒 𠨓 𠨔 𠨕 𠨖 𠨗 𠨘 𠨙 𠨚 𠨛 𠨜 𠨝 𠨞 𠨟 𠨠 𠨡 𠨢 𠨣 𠨤 𠨥 𠨦 𠨧 𠨨 𠨩 𠨪 𠨫 𠨬 𠨭 𠨮 𠨯 𠨰 𠨱 𠨲 𠨳 𠨴 𠨵 𠨶 𠨷 𠨸 𠨹 𠨺 𠨻 𠨼 𠨽 𠨾 𠨿 𠩀 𠩁 𠩂 𠩃 𠩄 𠩅 𠩆 𠩇 𠩈 𠩉 𠩊 𠩋 𠩌 𠩍 𠩎 𠩏 𠩐 𠩑 𠩒 𠩓 𠩔 𠩕 𠩖 𠩗 𠩘 𠩙 𠩚 𠩛 𠩜 𠩝 𠩞 𠩟 𠩠 𠩡 𠩢 𠩣 𠩤 𠩥 𠩦 𠩧 𠩨 𠩩 𠩪 𠩫 𠩬 𠩭 𠩮 𠩯 𠩰 𠩱 𠩲 𠩳 𠩴 𠩵 𠩶 𠩷 𠩸 𠩹 𠩺 𠩻 𠩼 𠩽 𠩾 𠩿 𠪀 𠪁 𠪂 𠪃 𠪄 𠪅 𠪆 𠪇 𠪈 𠪉 𠪊 𠪋 𠪌 𠪍

平民にして農業に従事し、第四は奴隷にして是は土蠻なり。此の婆羅門教は年を経るままに種種勝手なる理窟を付け、婆羅門自ら尊大にして他の諸族を壓制するに至れり。時に釋迦出でて新しき宗教を開き大改革をなせり、是即ち佛教なり。

釋迦は恒河中流の一國迦毘羅城の城主淨飯王の長子にして母を摩耶夫人といひ、名は瞿曇悉達にして釋迦牟尼は

其の尊號なり。孔子、老子及び釋迦の三聖大凡時を同じくして我が紀元百年頃に生まれたり。

釋迦深く人生の無常を感じ、王位を棄てて山林に入り



釋迦

釋迦

苦學難行の後、新一宗教を開きて中印度に布教したり。釋迦は婆羅門教に反對して一切平等の教義を唱へ、何人も邪慾煩惱を離るる時は齊しく高貴なる佛となることを得べしといへり。されば今まで婆羅門教に壓制せられたる諸族争ひて此の新宗教に歸依せしが、其の勢力は大抵恒河の流域を出でざりき。

歷山王の侵入

阿輸迦王

其の後、印度は希臘の歷山王の侵入を蒙りしが、中印度の摩揭陀國王希臘の守兵を追拂ひ、大に威を印度に振へり。摩揭陀國の阿輸迦王の代に至り、佛教を國教となして盛んに之を保護せしかば、佛教大に弘まりて西北はアム河の流域より、南は獅子國即ち錫崙島に至れり。此の時恰も我が紀元四百年頃にして支那は周の末、秦の初めに當れり。

第二章 秦漢及び三國の世

始皇

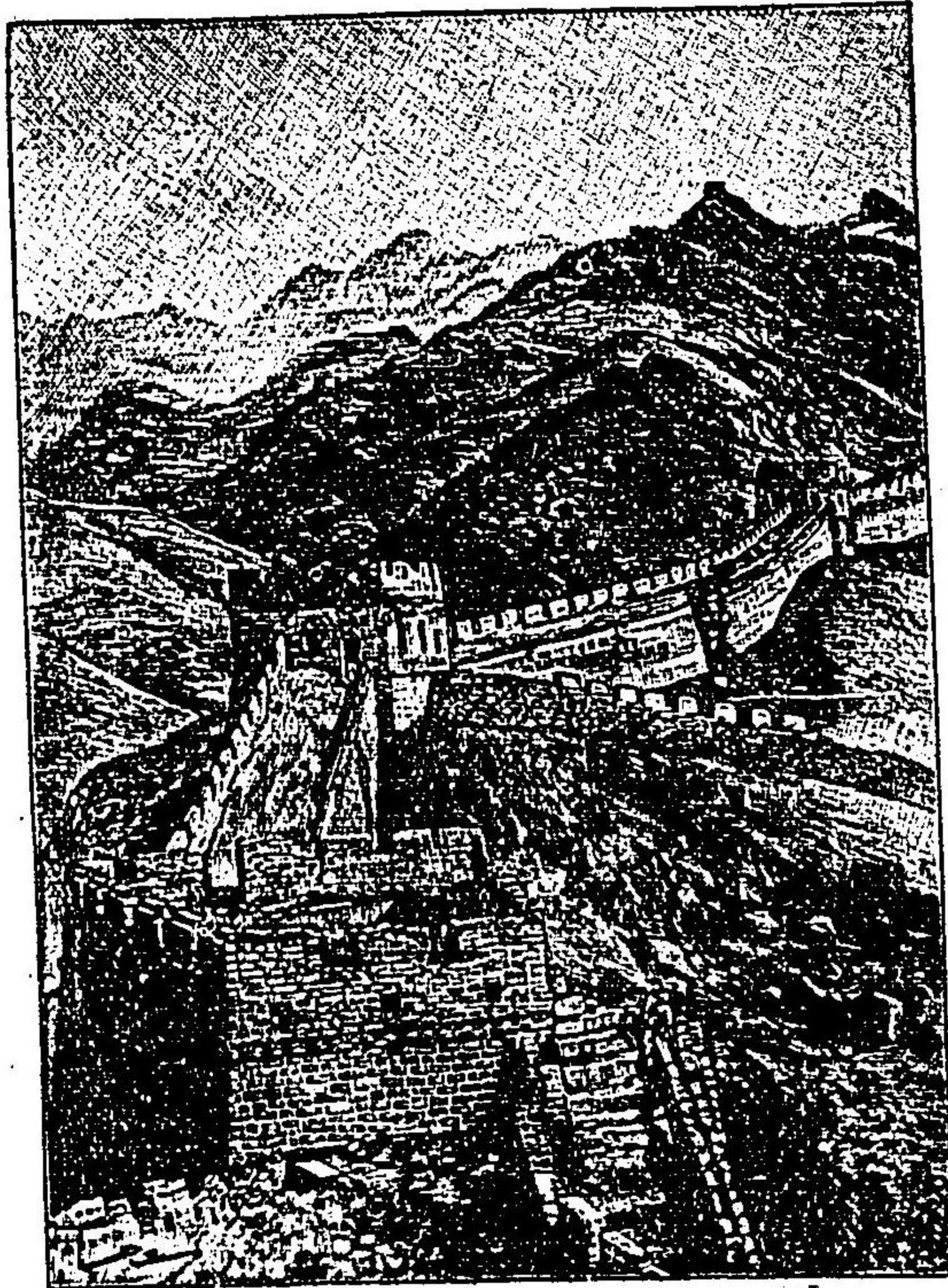
郡縣

匈奴
長城

六、秦の一統、漢楚の争 秦王政六國を亡ぼして天下を一統し、自ら始皇帝と號し咸陽西安附近に都せり。始皇は、周の末に諸侯強大なりし弊に鑒み、封建を廢して郡縣の制を始め、天下を郡に分ち、更に縣に小分し、地方官は皆天子之を任命し、政權を中央政府に集めたり。然るに天下の學者新政を非難する者多かりければ、天下の書籍を集めて之を燒き、政事を論議する書生を死刑に處せり。

此の頃北方に匈奴といふ夷族あり、頗る勇悍なる種族なり。始皇大兵を發して之を伐ち、萬里の長城を築きて之を防げり。長城は世界に有名なる大工事なり。此の時、秦の領地諸方に廣がり、其の名外國に聞こえ、外國人は秦を訛りて支那と呼びしより、遂に今日の通稱となれり。始皇は又咸陽宮、阿房宮等を營み、人民内外の工役に苦めり。

項羽
劉邦



始皇崩じ、其の子二世皇帝立ち、宦者趙高政を專らにして一層民の心を失へり。ここに於て叛人四方に起り、其の重なる者は項羽及び劉邦にして、

六國の舊臣亦起りて之に應ぜり。項羽は楚の舊臣の名家にして武勇人に勝れ、諸侯の軍の上將軍たり。劉邦は寛大の長者にして人望あり、頻りに軍を進め、眞先に關中(咸陽の東面なる函谷關より内)に入れり。二世に繼

きて立てる子嬰出でて降り、秦の世僅かに十五年にして亡びぬ。項羽擅に諸將を封じ、劉邦には西邊の山國漢中を與へて漢王となし、自ら魏楚の良地を取りて楚王となれり。劉邦漢中に在り、蕭何を相とし、韓信を將とし、張良陳平を謀臣として大に力を養ひ、兵を發して項羽と戦ふ。項羽屢漢の軍を破りしも、遂に垓下の戦に敗れて烏江に至り、自ら刎ねて死にき。

高祖

七、漢の初世 劉邦、天下を定め、天子の位に即き、長安に都す、是漢の高祖なり。高祖、秦が専ら郡縣の制を用ひ、孤立して容易く敗れしに戒むる所あり、子弟を諸國に封じて王となし、其の間また朝廷直轄の郡を置けり。而して功臣韓信の如き異姓の王國は事に由りて漸次に之を除けり。高祖崩じて子惠帝立つ。惠帝の母呂后才略あり、惠帝の

呂后と政子

多病なるに乗じて政を専らにし、呂氏の一族を封じて王とせり。呂后崩するに及び、大臣等劉氏の諸王と謀りて呂氏を亡ぼしき。呂后の性行頗る我が國の尼將軍政子に似たりといふべし。

文帝の勤儉

惠帝の弟立つ、之を文帝とす。文帝刑罰を輕くし、租税を薄くし、生業を勵ましければ天下平かに百姓富有なり。帝節儉を務め、寵する所の夫人の衣、地に曳かず。少女緹縈といふもの嘗て父の罪に代らんとて上書していへるや、『死する者は再び生くべからず、刑せられたる肉は再び復し難し、後に過ちを改むるもよしなし』と。帝之を憐み、肉刑を廢しき。

孝女緹縈

七國の亂

國初より諸王の權甚だ強し。文帝の次なる景帝は事に由りて屢諸王の地を削りき。諸王怨み、吳楚等の七國兵を

武帝

擧げて叛きしが、數月にして平ぎぬ。是より後、諸王を京師に留め、朝廷より任命せる國相を遣はして其の國を治めしむること恰も郡守の如し。是に由りて名は封建なれども其の實は郡縣と同じく、朝廷の威全國に行はれたり。

八、武帝の業、朝鮮、匈奴、西域等。景帝崩じて子武帝立つ。帝雄才大略あり、加ふるに文帝の勤儉に由りて國富み、景帝の政策に由りて帝權強く、内は文學を盛んにし、外は四方を征服し、漢室隆盛の頂上に達せり。

武帝大學を立て、博士を置き、始めて儒學を以て主となす。武帝また文詞を好みて文人多く出でたり。史記の著者司馬遷も此の時の人なり。

武帝の外征は南の方地を開きて安南に至り、東は朝鮮を取り、北は匈奴を破り、又使を遣はして西域諸國と通せり。

史記の著者

韓土

匈奴

今左に稍之を委しくすべし。

朝鮮の古史は詳かならず。殷の亡ぶる時其の王族箕子^キ避けて朝鮮に往き、遂に其の地に王となりて平壤に都し、大凡韓土半島の北部及び遼東地方を保てり。漢の初世に燕人衛滿といふもの朝鮮に入り、箕子に代りて朝鮮王となれり。武帝の時衛氏勢を恃みて漢に抗せし故、武帝大軍を發して朝鮮を亡ぼして郡とせり。韓土半島の南部は初めより朝鮮に従はず、馬韓、弁韓、辰韓の三國に分立す、即ち三韓是なり。武帝朝鮮を滅ぼしてより、漢と三韓と境を接するに至り、從來三韓と交通し來りし我が國と支那との交通の道も此の頃より開けたり。武帝の末年は我が崇神天皇の初朝に當れり。

匈奴は秦の末年より又もや内地の患へをなししかば、武

帝兵を發して之を伐ち、沙漠の北に追ひ拂ひ、今の内蒙古及び天山南路の地を征服せり。

西域

大月氏國

身毒

安息

西域とは匈奴の西邊と葱嶺以西の亞細亞諸國とを稱する語にして、其の諸國の重なる者はアム河地方の大月氏國、身毒國即ち印度及び今の波斯地方なる安息國等なり。武帝張騫を遣はして是等の諸國に通じ、西域の往來頗る開けたり。

宣帝の中興

九、宣帝の中興、漢の末世 武帝已に外征を務め、又盛んに樓閣、庭園の工事を起こしければ、盛極まりて衰となり、財政困難に、天下疲れたり。一代を隔てて宣帝に至り、深く民の艱難を知り、心を民政に盡くしければ、百姓業に安んじ、四夷服従し、後世帝を中興の主といふ。宣帝は純然たる政事家にして文學を深く好まざりければ、文學の士多く出でず、

烈女傳

只劉向ありて其の著書に烈女傳あり、古來名高き婦人の傳を集めたるものなり。

馮昭儀

宣帝の子元帝優柔にして決斷なく、宦者權を専らにすれども之を制すること能はず、漢の業是より衰へたり。元帝の世に名高き婦人二人あり、一人は宮女馮昭儀にして、或る時庭に飼置ける熊、圈を出でて殿上に上らんとしけるに、昭儀獨り止まりて帝の身を守り、遂に事なきことを得たり。

王昭君

他の一人は王昭君にして、漢が匈奴を懐くる爲めに匈奴王即ち單于の妻として昭君を遣はしければ、人皆之を憐めり、匈奴是より漢の婿と稱す。元帝皇后王氏を立て漢の禍是より萌せり。

王莽

王皇后の腹なる成帝の世に至りて王氏の一門勢力を得たり。後の侄王莽、奸才ありて大望を抱き、表べに恭儉を装

ひて人望を取り、政權を握るに至れり。莽遂に平帝を弑し、又其の太子を廢し、自ら帝位に升り、國を新と號せり。莽自ら周公孔子を氣取り、諸制度を變革して一に周の制に倣ひ、而も變更常なくして人民其の業に安んぜず。ここに於て盜賊諸國に起り、四方の豪傑兵を起こして王莽に反す。中にも景帝の後胤劉秀今の湖北省の地より起こり、頻りに莽が大軍を破り、遂に長安に入りて莽を斬る、是即ち後漢の光武帝なり。此の時我が垂仁天皇の御宇に當れり。

光武帝

十、後漢の政、匈奴、西域、佛教の東流 光武帝天下を定め洛陽に都す。帝都の位地に由り、光武以前の漢と以後の漢とを區別して史に西漢、東漢と稱し、又前漢、後漢ともいふ。光武は内治に心を用ひて民力を養ひ、又王莽の時に諂ひ

匈奴

の盛んなりし風を正さん爲め、學問を興し、節義を勵ましければ、後漢の世には學問盛んにして氣節の士多かりき。光武崩じて子明帝立つ。明帝能く父の業を繼ぎ、學を貴び、政を勤め、民安く、國富めり。是より先、王莽は匈奴の心を失ひしかば、匈奴屢内地に寇せり。明帝に至り、大に匈奴を破り、又武帝の昔を追ひて班超を遣はして西域に通ず。

印度にては阿輪迦王の後、摩揭陀國亡びて、婆羅門教再び中印度に勢を得たり。然るにアム河地方の大月氏國は安息國を破り、北西兩印度を領し、明帝の頃其の王篤く佛法を信ぜしかば、佛教徒は多く大月氏に集まりて北印度は佛教の中心となれり。此の時明帝の使恰も西域に通じ、大月氏に至りて佛像、佛經、及び僧徒を携へ歸りき。是より僧徒の漢に來る者多く、佛教漸く支那に流行せり。

佛教東流

班超兄弟
大秦

明帝崩じ、子章帝立つ。章帝政を爲すに寛厚を貴び、天下泰平なり。此の朝に班超西域に大功を立て、西は裏海に至るまで五十餘國漢に内附せり、超また使を大秦に通ず、大秦とは羅馬のことなり。超が兄固は有名の學者にして漢書を著し、固死して未だ成らざりし處は其の妹昭これを續げり。昭は曹氏に嫁し世に曹大家といふ、其の著す所に女誠あり、吾が國にも行はれたり。

曹大家

鮮卑

章帝崩じ、子和帝立つ。西域漢に服してより匈奴は四方に敵を受け、遂に大に漢人に撃破られて遠く裏海の邊に去れり。鮮卑といふ夷族今の滿洲の遼河邊より來りて匈奴の舊地に居り、勢漸く盛んなり。和帝の世に宦官權を専らにし、是より後、幼主相繼ぎて宦官の專横益甚しく節義の士を囚へ或は殺ししかば、人民憤り怨み、漢の世は末になりぬ。

曹操

十一、三國の世 後漢の政日に衰へて天下大に亂れ、英

孫權

雄四方に起りて勢を争へり。中にも曹操は智謀雄略最も秀で、天子を挟みて四方を征伐し、黃河南北の地を平定して殆ど揚子江の岸に迫り、勢力甚だ盛んなり。孫權は賢才を使い、國家を治むるに長じ、漸漸地を開きて揚子江の北岸より安南地方に至る東南一帶の地を保てり。又漢の景帝の後裔なる劉備は大人の風ありて喜怒色にあらはれず、巴蜀漢中に據りて西南一帶の地を取れり。斯くして諸國の英雄は皆此の三雄に併せられ、三國鼎立の形ちを成せり。

劉備

魏

曹操の子丕の世に至りて、後漢の最後の天子獻帝は迫られて位を丕に禪れり。曹丕位に即き洛陽に都し國を魏と號す。劉備も帝位に即き、成都に都し自ら漢の後裔なるを以て國を漢と號す、西漢東漢と分たん爲め、世に蜀漢と稱し、

蜀

吳

又略して蜀といふ。孫權も亦帝號を稱し、建業(今の南京)に都し、國を吳と號す。而して魏の勢最も強大なりし故、吳蜀は大抵連合して魏に當れり。

劉備の義弟に勇將關羽、張飛あり、謀臣諸葛亮字は孔明あり、共に蜀の三傑といふ。關羽の義、張飛の勇、孔明の智謀、忠誠皆後世に名高し。



孔明の妻

容貌醜かりしかと、淑徳才智人に勝れて孔明の事業を助くること少からざりき。劉備崩じて後、孔

武帝

明は後主劉禪を輔佐し、屢兵を出して魏と戦ひしも遂に志を遂げずして陣中に歿し、是より蜀衰へぬ。

魏には司馬懿字は仲達あり、軍陣にては常に孔明に一步を譲りしも、智略勝れ、勢力強く、魏の政權次第に司馬氏に移りたり。懿の子昭に至り、蜀の衰へに乗じて之を亡ぼしき。昭の子炎に至りて魏に代りて天子となる、是晉の武帝なり。武帝吳を亡ぼして天下を一統せり。三國分立の世は恰も我が神功皇后攝政の朝に當れり。

第三章 晉及び南北朝の世

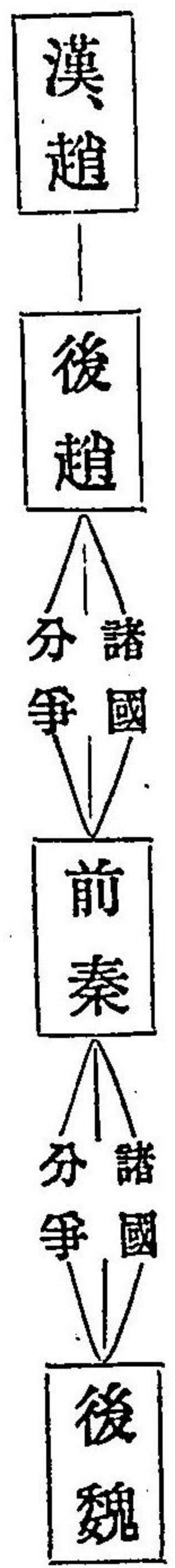
十二、晉、五胡十六國 晉の武帝魏の禪りを受け、魏の諸帝が刻薄にして子弟外戚を疎んじ、孤立して早く亡びたるに懲り、子弟を四方に封じて帝室の藩屏となししが、却て後日の亂の種となれり。是の事漢の初世と稍似たり。

武帝吳を亡ぼして後、心漸く怠り、武備を廢し、遊樂に耽り、政日に亂れたり。帝崩じて子惠帝立つ。惠帝暗弱にして皇后賈氏權略詐術あり、政を専らにす。諸王此の時に乘じて帝位を望み、權力を争ひ、互に攻伐殘殺して晉の藩屏全く破れたり。

漢以來、諸夷族の來り降りしものは大抵長城以内即ち塞内に雜居せしめしかば、年を追ひて繁殖せり。是等の夷族晉の衰へるに乘じ、互に國を立てて内地に帝と稱せり。是等の興亡を一一記す時は甚だ繁雜にして、理會し難きを以て左に最も強大なりし者を極めて簡略に記すべし。匈奴の後なる劉淵は祖先が漢の婿なるを以て劉氏を稱し、帝となり、國を漢と號せり。淵の子聰に至りて晉を侵し、洛陽を陥れ、遂に北方一帶の地を領せり。晉の王族庾建康

東晉

(南京)に即位す、是を元帝となす。此の後、晉は唯江南を保つのみ、是を東晉といふ。既にして漢は趙と改稱し、内亂ありて、其の將石勒、趙の全土を略有す、是を後趙といふ。後趙亂れて領土分裂せしが、苻堅悉く北方諸國を併吞す、是前秦なり。前秦また分裂して、鮮卑の拓跋氏遂に全く江北の地を併吞し、國を魏と號す、即ち後魏なり。之を略表に作ることを左の如し。

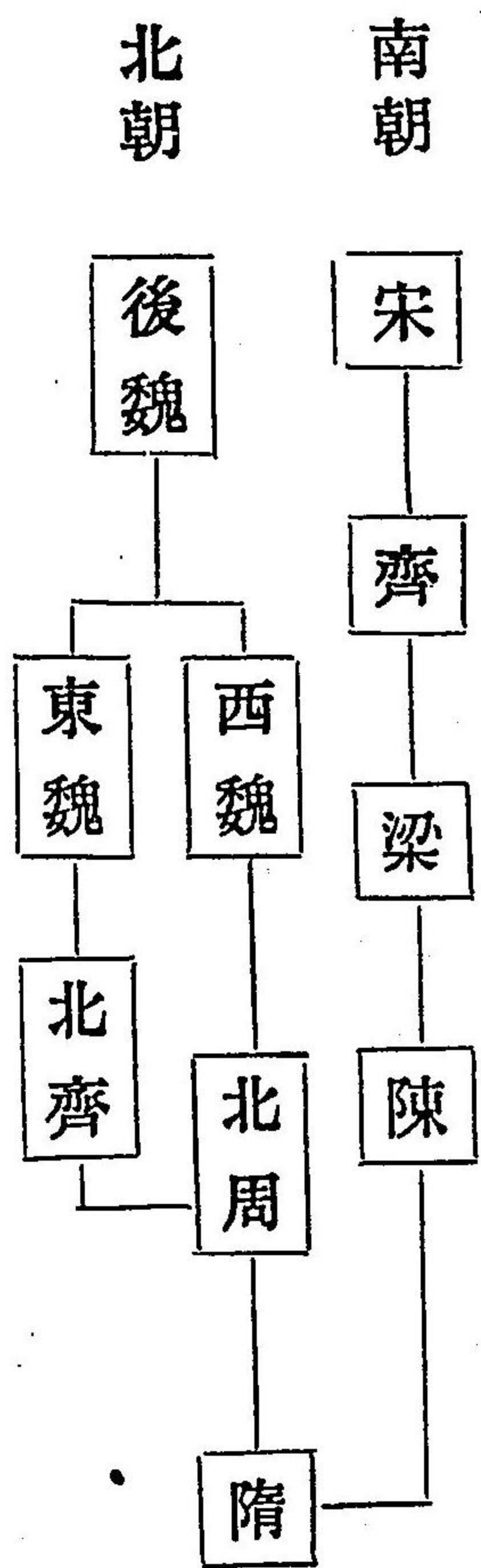


江南にては晉遂に衰へて位を其の將劉裕に禪れり、是宋の高祖なり。斯くして江北は魏に屬し、江南は宋に歸し、南北兩大國になりぬ。江北に興亡せし諸夷族は何れも漢族と同じく黃人種に

して其の種族五種なり、匈奴、羯、氐、羌、鮮卑是なり。今の學語を以て云へば、匈奴と羯とは土耳其族、氐と羌とは西藏族、鮮卑は通古斯族（一説蒙古族）なり。種族五にして、國を立つること前後十六國なりしかば之を五胡十六國といふ。

十三、南北朝、六朝の文藝 後魏は江北の諸國を併せ、宋は江南の晉に代りて、支那は二大國に分立せしこと已に云へる如し。斯くて後隋の一統に至るまで江北の歷朝を北朝といひ、江南の歷朝を南朝といふ。南北朝共に交代繁くして委しく云ふは煩はしければ是も亦極めて簡畧に記すべし。南朝は宋、齊、梁、陳の四朝相傳へたり。北朝は後魏分裂して西魏、東魏となり、西魏は北周に傳へ、東魏は北齊に傳へしが、北周は北齊を亡ぼして北朝再び合一し、楊堅其の禪りを受く、是を隋の文帝となす。文帝南朝の陳を亡ぼして

天下又一統す。左の圖に由りて系統を記憶すべし。



六朝

陶淵明

六朝の文と我が朝の文

三國の吳より東晉、宋、齊、梁、陳何れも建康に都せり、之を六朝といふ。曹操父子文學を好み、詩文相繼ぎて發達せしが、五胡の亂より文士は大抵江南に在りて東晉の陶淵明最も名高し。南北朝に至りて益々字句の巧みを競ひ、好んで對句の文を作れり、之を六朝風の文といふ。我が王朝の漢文は大抵六朝風にして古今集の序なる『仁流秋津洲之外、惠茂筑波山之陰、淵變爲瀨、之聲寂寂閉口、砂長爲巖、之頌洋洋滿耳』な

王羲之

王羲之

とは此の例なり。東晉の王羲之最も書法に妙にして後世斯の道の聖人と仰がる。

達磨

佛教は南北朝共に流行せり。梁の初代なる武帝最も篤く佛教を信じ、達磨大師此の時印度より渡りて禪宗を傳へたり。佛教の興隆につれて繪畫、彫刻、建築等の美術漸く進歩したり。

三韓

十四、韓土の三國分立 已に云へる如く、漢の武帝古朝鮮を亡ぼして郡となしたれども、韓土の南部は舊の如く馬韓、弁韓、辰韓に分かれたり。馬韓は大凡今の京畿、忠清、全羅の三道にして、辰韓は慶尙道の東北部を占め、弁韓は其の西南部を占めたり。

高麗

西漢の末に朱蒙といふもの族人を率ゐて滿洲より來り、鴨綠江の上流に高句麗國を建て、漸次に勢を得て遂に大凡

百濟

古朝鮮の地を領するに至れり。高句麗又略して高麗と云ふ。朱蒙の次子溫祚といふもの馬韓に往きて百濟といふ部落を立て、是も終には勢を得て大凡馬韓の地を領せり。又辰韓の一部落なる新羅も次第に他部落を併せて遂に辰韓、弁韓を一統せり。斯くして韓土半島には新羅、百濟、高麗の三國鼎立せしが、我が國にては是をも三韓と稱せり。

加羅

此の外、東漢の初めに、弁韓の地に加羅國といふ小國立てり。加羅國、新羅の攻撃に苦しみて我が崇神天皇の時に來朝して保護を請ひ、國號を任那と賜はりき。新羅は最も我が日本に近くして、九州地方の亂民と相通ぜし故、神功皇后之を征服し給ひ、ついで百濟、高麗も朝貢し、爾來任那に日本府を置き、之を鎮せられしこと等は已に日本歴史にて知る所なり。我が國にて韓土全體を『から』と

稱し、遂には支那をも『から』といひしは此の加羅國より始まり。

斯くて百濟及び他の二國は支那より傳へたる文學、佛敎を我が國に傳へ、又は工藝、技術を輸入して我が國の文明を助くること少からざりき。

然るに高麗と百濟とは前年より敵國となり、新羅は常に高麗と連合して百濟を攻め、又屢任那を侵し、欽明天皇の御時任那遂に亡びて日本府亦絶えぬ。此の時支那は南北朝の末世なり。

任那の滅亡

第四章 隋唐の世

十五、隋の世、唐の初世 隋の文帝天下を一統し、専ら心を民政に用ひければ、天下太平に人民安堵せり。帝崩して其の子煬帝嗣ぐ。我が推古天皇の御宇、聖德太子攝政の時、

聖德太子時代の交通

遣隋使を遣はされ、初めて國際の交通となりしは此の時なり。

大運河

煬帝豪華を好み、長安、洛陽の兩京に宮殿を造營し、黄河、揚子江の間に有名なる大運河を通じ、長安より船にて江南に遊ぶべくせり。又外征を好みて四方を征伐し、大に土地を開きしが、高句麗朝貢せざるを以て大兵を發して之を討ち、大に遼東に敗られて歸りぬ。

天下の民土木に征伐に苦しみて皆亂を思へり。遼東の敗れより諸方の豪傑争ひ起り、天下又亂れたり。中に就きて太原の留守李淵の子李世民大才あり、父に勸めて兵を擧げしめ、又援を北方の夷族突厥に乞ひて長安を占領せり。

此の時煬帝は江東に遊樂中なりしかば、李淵別に帝を立て、遂に其の禪りを受けたり、之を唐の高祖とす。世民は四方

唐の太宗

長孫皇后

高宗

の豪傑を討ちて之を平げ、天下又一統せり。
 高祖、位を世民に傳ふ、是を唐の太宗となす。太宗心を民
 政に用ひ、賢臣に任用し、制度整ひ、學問興り、天下太平、百姓安
 樂にして、秦漢以來第一の明君と稱せらる。皇后長孫氏淑
 徳ありて、内助多く、太宗之を宮中の良佐と稱せり。太宗ま
 た外國を征し、夷族を征服せしが、高麗を討つに至り、利あら
 ずして軍を還しき。



唐の賢臣、高宗を輔けて天下を治め、
 太宗崩して子高宗嗣ぐ。前代
 此の二代は實に唐の最も盛んな
 宗りし時なり。高宗また外國を征
 して地を開き、遂に高麗、百濟を亡
 ぼしき。外國の事及び制度の事

突厥

は項を改めて委しくすべし。

十六、唐と外國との關係 南北朝の頃より土耳其種の一なる突厥漸く威を沙漠の北に振ひ、東は滿洲より西はアル湖に至り、分れて東突厥及び西突厥となれり。唐の高祖嘗て突厥に援を乞ひしことありければ、突厥は唐を侮りて屢、内地を侵せり。太宗に至りて東突厥の内亂に乗じて之を亡ぼし、高宗に至りて又西突厥を亡ぼせり。此の間唐の勢力強くして西北の諸國續續と唐に歸せり。

百濟高麗の滅亡

韓土に於ては、已に云へる如く、高麗は新羅と連合して百濟を苦しめしが、後には新羅の勢を嫉み、却つて百濟と同盟して新羅を討たんとせり。新羅孤立して屢、救を唐に求めき。因りて太宗は兵を出だして高麗を討ちしも利あらず、高宗に至りて百濟を亡ぼし、遂に高麗をも亡ぼししこと已

に前節に云へり。我が齊明天皇女帝の御身を以て舟軍を率ゐて筑紫に幸し、百濟恢復を圖り給ひしは此の高宗が征韓の時の事なり。然るに時利あらずして新羅以外の地悉く唐に歸し、我が國は韓土半島を失へり。

大食國

斯くして唐の領土屬國は東西に廣がり、西は波斯、印度と接近し交通頻繁なるに至れり。當時波斯は大食國の占領する所なり。大食とは隋唐交代の頃にアラビアに興りたる回教の祖マホメットが開きたる帝國にして葱嶺以西の地は一帶之に屬せり。此の交通の爲めに唐に輸入したる教法の事は亦項を改めていふべし。我が國とは三韓の争ひありしにも拘らず、唐より使を遣はして好しみを修めければ、我よりも遣唐使を遣はして交通し、其の文物制度を輸入せり。

武后

十七、武韋の禍開元の治、安史の亂 高宗の皇后武氏權略ありて政を専らにせり。高宗崩じて後、武后は相繼いで中宗及び睿宗の二帝を立て、何れも之を廢して遂に自ら位に即き國を周と號せり、謂はゆる則天武后是なり。武后能く狄仁傑、張柬之等の名臣を用ひければ、天下幸に無事なりき。武后病める時、張柬之の兵を起して后に迫り、中宗をして位を復せしめ、唐室また興れり。

韋后



中宗位を復して皇后韋氏政に與る。后品行修まらず、帝の怒りを畏れて遂に帝を毒殺せり。睿宗の子隆基兵を起して后及び其の黨を誅し、また睿宗を立てたり。

玄宗

開元の治

阿倍仲麻呂

楊貴妃

安祿山の亂

睿宗位を隆基に傳ふ、之を玄宗となす。玄宗即位の初め、賢才に任じ、政治を勵みければ、天下平かに、百姓富み、學術工藝進歩せり。年號に由りて之を開元の治といふ。我が國の吉備眞備、阿倍仲麻呂等唐に留學し、仲麻呂遂に留まりて唐に任へしは此の時なり。

玄宗後年政に倦みて奢侈に耽り、楊貴妃を寵愛して其の一門を重く用ひ、賞賜すること限りなし。時に突厥の降將に安祿山といふものありて野心を蓄へ、楊貴妃に結びて帝の信任を得、多くの方面の節度使を兼ね、其の兵權を握れり。祿山遂に兵を擧げて洛陽、長安を陥れ、自ら帝と稱す。玄宗蜀に出奔し、位を太子に傳ふ、是を肅宗といふ。

其の後郭子儀、李光弼等の名將勤王の軍を起こし、又突厥の舊地を占めたる回紇等の援兵も至り、官軍大に振ふ。時

節度使

に祿山の長子祿山を殺す。祿山の將史思明之に繼ぎて自ら帝と稱せしが、亦其の長子の爲めに殺さる。官軍之に乗じて長安を恢復し、遂に全く亂を平ぐ。年號に因りて天寶の亂といひ、又安史の亂ともいふ。

十八、藩鎮宦官の禍、唐末の大亂 唐の節度使は元と邊要の國を守る武官なりしかど、安祿山の亂以後は内地も兎角穩かならず、加ふるに此の亂に功ありし回紇等の夷族は心驕りて屢入寇するを以て、全國普く節度使を置くに至れり、是謂はゆる藩鎮なり。而も此の後の節度使は兵權と政權とを握り、勢日に強大にして恰も藩王の如く、父死すれば子之に代らんことを請ひ、許されざれば藩鎮相黨して亂を起こし、朝廷之を制すること能はず。

憲宗の時、裴度等の名將を用ひて手強く藩鎮を制せしか

ば、驕慢なる諸鎮皆破れ朝威稍重し。然るに憲宗心漸く驕り、賢者を疎んじ、宦者を信任せしかば、さらぬだに勢力を得たる宦者は專横益甚だしく、憲宗は其の毒手にかかりて崩じ、藩鎮も亦漸く驕慢なり。

唐の初世には宦官の勢力なかりしが、玄宗遊宴を好みしより宦官漸く勢を生じ、亂離の世には常に天子の左右に侍して其の信任を得、遂には政務に與かり、禁軍を統べ、其の勢制し難きに至れり。されば憲宗は其の毒手に死し、後の天子は多く彼等が爲めに廢立せられ、卑劣なる大臣は亦内官と結びて勢力を張る者あり。

ここに於て天下大に亂れ、盜賊諸方に起こり、中にも黄巢なる者勢盛んにして洛陽、長安を取り、齊帝と稱せしが、李克用といふ豪傑軍を起こして之を平げたり。黄巢の降將朱

朱全忠

遣唐使の廢止

大化大寶の制度と唐の制度と

官制

全忠節度使に拜して勢力強かりければ、昭宗の時全忠を召して悉く宦官を殺しき。全忠功に誇り、遂に唐を篡ひて帝となり、國を後梁と號す。然れども李克用等の豪傑諸方に割據し、天下益亂れたり。此の時我が延喜時代にして菅公の建言に由り遣唐使廢せられし頃なり。

十九、唐の制度、宗敎 太宗、高宗の二代は唐の最も盛んなりし時にして、多くの制度は此の時に計畫せられたり。我が國の大化、大寶の制度も唐のを参考取捨せられし所多ければ、今少しく左に記す所あるべし。

官制の重なる者は三省六部なり。三省とは中書省、尚書省、門下省にして、中書省は詔勅を宣奉し、門下省は之を審査するを掌る。尚書省には六部を統ぶ、六部とは吏部、戸部、禮部、兵部、刑部、工部なり。吏部は官吏の進退を司り、戸部は賦

田制

税、禮部は禮儀、兵部は兵事、刑部は刑罰、工部は土木を掌る。我が國王朝の制に比較すれば中書省は中務省に同じく、尚書省は太政官に似たり。而して吏部は式部省に同じく、戸部は民部、禮部は治部、兵部は兵部、刑部は刑部に同じ。田制は全國の壯丁に官田を給し一代限りにて返納せしむ、我が國の班田收授、口分田の制は是より出でたり。税に租庸調の三種あることも我が國に同じ。其他軍團の組織等皆大同小異なり。

回教

太宗、高宗の世に外征成功し、西方の諸國と境を接したるが爲め、種種の宗教東流し來れり、即ち回教、景教等なり。回教即ちマホメット教は異教折伏を以て重要なる義務とし、『我が教を奉ぜよ、然らざれば貢を納れよ、然らざれば唯劔あるのみ。』是第一の教義なり。景教は耶蘇舊教の一派なり。

景教

佛教

其他一二の宗教輸入したれども肝要ならず。佛教は元より支那に流行せしが、太宗の時有名なる玄奘三藏、印度を歴遊して多くの佛經を携へ歸りて翻譯せり。玄奘以前の譯を舊譯といひ、玄奘の時のものを新譯といひ、新譯は最も佛經の豊富なる時代なり。我が國の最澄、空海等が留學求法せしは皆玄奘以後に在り。

道教

此の外支那には道教あり。道教とは老子の教と、邪念を去りて神仙とならんとする教との混合したるものなるが、唐の世に至りて大に之を保護し、今猶支那に流行せり。

漢唐の儒學

二十、文藝 兩漢の學は専ら秦以前の古書を註解するを事とし、唐に至りても稍之を敷衍するに過ぎざりしが、文章に於ては唐に至りて一大改革をなせり。前に云へる如く、魏晉以後の文章は字句の綺麗を競ひ、好んで對句を用ひ

文章

我が王朝の詩

詩

しが彼の藩鎮を挫ぎし憲宗の朝に、韓愈字は退之、柳宗元字は子厚といへる二人の大文章家あり、遠く秦漢以前の體に溯りて文章を作り、對句の小細工を破りければ、再び氣力雄健、議論自在の文を見るに至り、天下後世之を模範とせり。詩は唐に至りて全盛を極め、是亦後代の模範となれること譬へば我が古今集時代の如し。絶句といへる短き詩の唐に興りたるは古今集以後短歌の多く行はれたるにも似たり。詩人の最も名高きは玄宗時代の李白字は太白と杜甫字は子美とにして、詩にて『李杜』といふは和歌にて『躬恒貫之』といふが如し。又韓愈と同時に、白居易字は樂天といふ人あり、此の人の詩は婦女子にもわかり易くして、我が國人には最も珍重せられたり。彼の『香爐峯雪撥簾看』といふ句も白樂天のにして、王朝の詩は多く此の人を學べり。

書

書は王羲之時代に亞きて精妙に至り、後世及ぶべからず。唐の能書を『歐褚顔柳』といふ、委しくいへば歐陽詢、褚遂良、顔真卿、柳公權にて、顔真卿は安祿山の亂に忠義を以て名高し。

永和九年
癸丑

歐陽詢の筆

畫

畫には王維、李思訓あり、王維の流派を南宗ナンシュウといひ、李思訓の流派を北宗といふ。後に南宗畫は多く文人隱士の間に行はれたるを以て我が國にて之を「文人畫」といふ。又北宗には専門畫家として帝室の畫手たるもの多く、我が國の狩野家などは此の流派なり。

音樂

音樂は玄宗最も深く之を好み、禁中の梨園に教坊を置き、自ら弟子を教へ、斯の道甚だ盛んなり。我が國の吉備眞備なども唐樂を輸入したる一人にして、我が雅樂は大抵唐樂及び韓樂なり。

我が雅樂

第五章 五代及び宋の世

二十一、五代及び宋の初世 朱全忠、唐に繼ぎて帝と稱せしも、群雄割據して天下統一すること能はざりしは已に云へり。而して朱氏の後梁以後國朝の交代すること繁く

して、五十餘年間五回の多きに至れり。爰には唯其の國號を記すのみに止むべし、即ち後梁、後唐、後晉、後漢、後周の五朝にして之を「五代」といふ。其の中後漢の如きは僅かに四年にして亡びぬ、國運の短きも亦甚だしからずや。



契丹

此の頃契丹キタンといふ夷族強大になれり。契丹は今の遼河邊即ち鮮卑の舊地に住める夷族なりしが、唐末の亂に乗じて次第に地を廣め、滿洲及び内蒙古の地を保ちて帝と稱せり。後晉の如きは實に契丹の助けに由りて後唐を亡ぼして天下を得たりしに、後其の禮を失ひしかば、契丹主怒りて晉を亡ぼし、國を遼と號し、中國に君たらんとせり。然るに遼は人民を剽掠して其の怨みを買ひ、反抗に堪へずして北に返りしかば、後漢は其の守兵を逐ひて之に代りしなり。

遼

かくて後、後周の將趙匡胤將士に推されて帝と稱し、汴京（今の開封府）に都す、是を宋の太祖となす。太祖次第に割據の諸國を平定して天下を一統し、又藩鎮の制度を改良して政權を朝廷に收め、遂に郡縣の政となしたり。

第三代真宗の時、遼主大軍を率ゐて入寇せしが、真宗親征して一旦之を却けたり。然れども宋は交戦の續くを厭ひ、年年莫大の銀絹を贈らんことを約して和を講じたり。

次の仁宗の世には歐陽修、司馬光、其他名臣多くして内治頗る宜しかりき。然れども此の頃、天山南路の邊を領して帝と稱せる西夏國屢入寇し、遼も亦更に求むる所あり。ここに於て宋は已むを得ず、遼に向つて年年の歲幣を増し、又西夏にも毎年銀絹等を贈らんことを約して和を結びたり。宋は外寇に向つて常に斯く平和の主義を執れるを以

て、夷族は之を輕んじ侮れり。

二十二、神宗の新法、政黨の争 第五代神宗は外に向ひて國威を張らんことを欲したれども、年年遼夏に贈る歲幣等にて國力足らざりければ、先づ富國強兵の政を行はんとて王安石を擧げて執政となし、種種の新法を發布したり。其中、青苗法とて、苗植付けの時、政府より元手を農民に貸付け、收穫の時利子を加へて返納せしむる法は最も有名のものなり。

王安石
青苗法

ここに於て司馬光、歐陽修、蘇軾、程顥等の學者、政事家、交新法を非難して祖宗の制に背くことを論ぜり。王安石は一種の學者はだの人にして實務の材に非ざりしに、其の用ふる所の人は皆小きかしく小人にて、且新法は利を營む事業なれば、種種の弊害を生じて人民皆怨み、非難の聲益高かり

かくて後後周の將趙匡胤將士に推されて帝と稱し、汴京（今の開封府）に都す、是を宋の太祖となす。太祖次第に割據の諸國を平定して天下を一統し、又藩鎮の制度を改良して政權を朝廷に收め、遂に郡縣の政となしたり。

第三代眞宗の時、遼主大軍を率ゐて入寇せしが、眞宗親征して一旦之を却けたり。然れども宋は交戦の續くを厭ひ、年年莫大の銀絹を贈らんことを約して和を講じたり。

次の仁宗の世には歐陽修、司馬光、其他名臣多くして内治頗る宜しかりき。然れども此の頃天、山南路の邊を領して帝と稱せる西夏國屢入寇し、遼も亦更に求むる所あり。ここに於て宋は已むを得ず、遼に向つて年年の歲幣を増し、又西夏にも毎年銀絹等を贈らんことを約して和を結びたり。宋は外寇に向つて常に斯く平和の主義を執れるを以

て、夷族は之を輕んじ侮れり。

二十二、神宗の新法、政黨の争 第五代神宗は外に向

ひて國威を張らんことを欲したれども、年年遼夏に贈る歲幣等にて國力足らざりければ、先づ富國強兵の政を行はんとて王安石を擧げて執政となし、種種の新法を發布したり。其中、青苗法とて、苗植付けの時政府より元手を農民に貸付け、收穫の時利子を加へて返納せしむる法は最も有名のものなり。

王安石
青苗法

ここに於て司馬光、歐陽修、蘇軾、程顥等の學者政事家、新法を非難して祖宗の制に背くことを論ぜり。王安石は一種の學者はだの人にして實務の材に非ざりしに、其の用ふる所の人は皆小さかき小人にて、且新法は利を營む事業なれば、種種の弊害を生じて人民皆怨み、非難の聲益高かり

き。然れども安石は悉く反對の諸名士を退けて斷然新法を行ひき。

女中の堯舜

次の帝哲宗の初めに、太皇太后高氏攝政し、新法黨を退けて司馬光に政を任じたり。太后賢明仁慈にして女中の堯舜と稱せられたり。哲宗政を親らするに至りて新法黨再び勢を得て政權を握り、反對黨を罰したり。

次の帝徽宗の世にも、初めは新法黨退けられて反對黨用ひられしが、後に新法黨の蔡京政を執れり。此く政黨の争のみ烈しくして國力却つて衰ふるに至れり。加ふるに徽宗奢りを好みて費用足らざりければ、蔡京専ら歳入の増加を計りて帝の寵遇を固くせり。蔡京又外に向つて功を立てんと欲し、女眞と連合して遼を討つる策を立て、却つて後日の禍を招けり。女眞の事は次節に記すべし。

女眞

二十三、宋と遼金との關係　女眞は遼と同じく通古

金

斯族にして黒龍江附近に住みて、遼に屬したるが、此の頃に至り勢漸く強大なり。徽宗の世に、遼の政衰へたるに乗じて、女眞は遂に遼に叛きて帝と稱し、國を金と號す。遼は金を討たんとして却つて敗れ、金益南に下りて遼の地を侵せり。この時宋は金と連合して南北より遼を夾み撃つる策を立てしことは前節に記せり。然るに宋の軍は功なく、金は獨力を以て遼を亡ぼして其の國を取れり。斯くて宋は金に向つて莫大の軍費及び歳幣を約せり。

既にして金は宋が信を失ふに事よせて宋の地に侵入せり。徽宗自ら不徳を責め、位を欽宗に讓る。然れども朝臣皆戰ふ心なく、遂に又多くの土地金帛等を贈りて和を結びたり。幾ばくもなく宋其の約に背きければ、金再び兵を出

南宋

して汴京を陥れ、徽宗、欽宗等を執へて北に還れり。
 ここに於て高宗位に即き、ついで金の難を避けて都を臨
 安(今の浙江省の杭州)に遷せり。國都南に遷れるを以て是
 より後を南宋といふ。斯くて金の地は益膨脹せり。
 此の後、宋と金との間に屢交戦ありて、宋には岳飛、韓世忠
 の如き忠勇の名將勤王し、屢金の軍を破りしかど、執政秦檜
 は固く和議を主張し、高宗も早く徽宗、欽宗等を蒙塵より救
 はんことを欲しければ、遂に又種種の條件を約して和議を
 結べり。岳飛の如き主戦論者は秦檜が爲めに嚴刑に處せ
 られぬ。
 此の後も或は金より約を破り、或は宋より約を破りて戦
 ひを開きしが、いつも宋が歲幣を約して和を講ずるに終れ
 り。斯くして宋は日に衰へ、金も亦漸く振はざるに至りて、

宋代の儒學

程朱の學

徳川時代の官學

程子の母

此の二國を統一すべき蒙古帝國は外蒙古の地に起これり。
 蒙古の事はまた節を改めて説くべし。

二十四、宋代の儒學、文藝 已に云へる如く、漢唐の儒學
 は唯古書の註解をのみ務め、謂はゆる訓詁の學なりき。宋
 の學者に至りて、竊に佛學を研究して之を儒學に應用し、深
 く其の義理を講究す、之を理學といふ。此の派の學者に最
 も著しき人は程顥、程頤兄弟にして南宋の朱熹之を大成し
 たり、之を朱子學といふ。我が國の



朱熹
 王朝の學は訓詁の學なりしが、徳川
 時代に藤原惺窩、林道春等の講じた
 る者は此の朱子學にして爾來大抵
 官學として用ひられたり。

程顥兄弟の母は仁慈にして異腹

文章 書 畫

の子を、恵むこと實子に異ならず、婢僕を憐むこと亦子弟の如くなりき。然れども子を訓ふること嚴正にして、若し過ちあれば必改めて後に赦しき。二子が成功は母の教育に由ること多かりしなり。

文章は五代の亂に由りて衰へたりしが、宋に至りては彼の歐陽修、蘇軾、王安石等能文の士多く、何れも古文に溯りて唐代の韓柳と肩を並ぶるに至れり。詩も亦是等の人によりて再興せられたり。蘇軾は謂はゆる東坡先生なり。南宋に至りては陸游、號は放翁の詩最も著明なり。

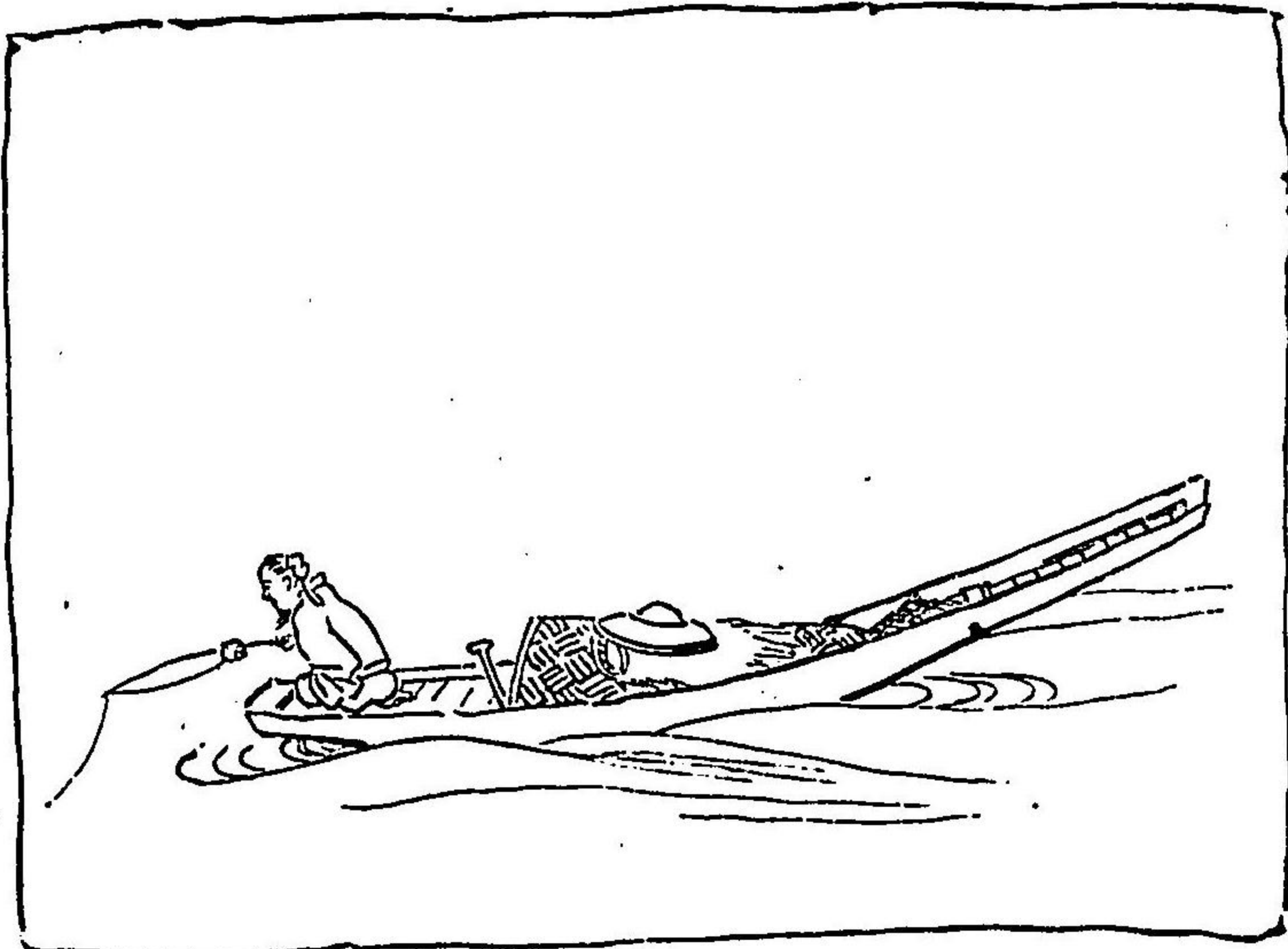
書は米芾字は元章最も有名なり。同時に蘇軾、黃魯直、蔡襄も頗る書を善くせり。一般に宋代の書は晉唐に比して謹嚴なる風少し。

畫は徽宗の奨勵に由りて大に盛んになれり。我が東山

宋 代 夏 桂 の 筆



宋 代 馬 遠 の 筆



禪宗
榮西

時代の畫特に狩野家の畫は主として宋代の畫風より出でたり。

前に云へる如く、宋代の學者は、多く佛學を研究し、殊に禪學流行せり。我が鎌倉時代の初めに僧榮西が支那より歸朝して禪宗と茶とを傳へたるは南宋の時にして大凡朱熹と時を同じくせり。

二十五、高麗及び西方諸國 宋と金とが後に蒙古に併せらるべきことは已に云へり。今又同じく蒙古に征服せらるべき高麗及び西方諸國の現状を述べ置きて然る後に蒙古の侵略に説き及ぼさんとす。

已に云へる如く、唐の高宗の時、百濟高麗の二國唐に亡ぼされ、新羅は唐に朝貢せしが、後に唐の内亂あるに乗じて新羅は漸く地を廣めて殆ど韓土半島を一統せんとせり。唐

高麗

の末に至りて新羅の政衰へて國內分裂せしが、王建といふもの遂に全土を一統して國を高麗と號せり。此の時我が天慶の亂に當り、支那は五代騷亂の時なり。前の高麗に別たんため之を後高麗ともいふ。かくて高麗は相續きて宋遼金の三國に朝貢せり。

さて西域は前に云へる如く葱嶺以外の地皆アラビヤ帝國即ち大食國に屬し其の勢盛んなりしが、主長の興亡屢ありて宋の中世には其の地全く突厥族のセルヂユク帝國に歸せり。突厥は先に唐の爲めに追はれて西に移りし者なるが、此くの如く勢を得て遂に印度にまで侵入せり。

斯くて遼が金に亡ぼされし時、遼の王族耶律大石衆を率ゐて西に遁れ、此の突厥族の地を侵し、アム河以北の地を奪ひて國を建て、西遼と號す。西遼より西はセルヂユクの一

セルヂユク帝國突厥族

西遼

ホラズム

派にしてホラズムと稱せり。此の西遼及びホラズムの二國は宋の末世に於ける西域を代表すべき大國なりと知るべし。

蒙古

成吉思汗

二十六、蒙古の勃興、宋の滅亡 いざ是より蒙古の來歴を記すべし。蒙古は元と黒龍江の上流なるオノン、ケルレン兩支流の流域に住める夷族にして初めは遼に屬し、後に金に屬したり。南宋時代に酋長鐵木眞といふ英傑あり、悉く外蒙古の諸部落を一統して成吉思汗と號せり。『汗』とは君といふ義なり。此の人の時代恰も我が義經と同じ。成吉思汗已に外蒙古を定め、次に西夏を攻めて之を降し、更に金を攻めて殆ど黄河以北の地を取れり。然るに先に成吉思汗に亡ぼされたる蒙古部落の酋長屈出律といふもの奔りて西遼に身を寄せ、遂に鄰國ホラズム

太宗の遠征

の王と通じて西遼の王位を篡ひ、常に蒙古の虚を伺ひて前年の怨を復さんとせり。因りて成吉思汗兵を遣はして屈出律を攻殺し、悉く西遼の故地を取り、ホラズムと境を接せり。ついで蒙古の隊商ホラズムに入りて殺されしかば、成吉思汗怒りて遂にホラズムを攻亡ぼし、其の軍勢に乗じて阿羅思今の露國を掠めて歸りき。斯くて成吉思汗は再び兵を率ゐて金を攻めんとし、途中にて病死せり、是即ち元の太祖なり。子太宗嗣ぐ。太宗は宋と約して金を夾み撃ち、遂に之を亡ぼせり。此の頃高麗にて蒙古の使者を殺したることありしかば、太宗兵を遣はして之を攻降せり。太宗は太祖の遺志を繼ぎて更に西征の大軍を起こせり。太祖の孫拔都を大將として、總軍五十萬、西伯利亞の荒野を

欽察汗國

過ぎて阿羅思を踏破り、遂に今の獨逸地方に攻入り、歐洲諸國之が爲めに震動せり。然るに太宗崩じければ、西征の大軍を還し、拔都は留まりて征服諸國を領す、之を欽察國の祖となす。

伊兒汗國

太宗の子定宗立ち程なく崩じ、太宗の弟の子憲宗立つ。憲宗太弟忽必烈をして西藏を略せしめ、又其の弟旭烈兀をして波斯、小亞細亞地方を伐たしむ。旭烈兀其の地を平定し、ここに伊兒汗國即ち伊蘭國の祖となれり。

忽必烈

文天祥

憲宗崩じて忽必烈嗣ぐ、之を世祖となす。燕京今の北京に都し、國を元と號す。世祖宋を攻めて國都に迫る。文天祥等義兵を起こして防ぎしが、皆破られ、最後の天子帝昺海に入りて死し宋亡びぬ。時に我が弘安二年なり。

第六章 元明の世

四汗國

二十七、元の隆盛及び衰亡 元の世祖宋を亡ぼして支那を一統せり。其の全帝國は北は蒙古より南は安南に至り、東は海に臨み西は歐洲の黒海を包めり。朝廷直轄の地の外に皇族世襲の領國あり、そは前に云へる欽察國、伊蘭國と察合台國及び阿窩台國にして、察合台は元の西遼の地に在り、阿窩台はバイカル湖の西部を占む。

我が元寇



元世祖

斯くて世祖は我が日本をも臣屬せしめんとて高麗を媒として來り促し、我が應ぜざるを怒り、大舉して入寇したるも、遂に失敗に終りしことは本邦史に詳かなり。然れども後印度及び南洋の征伐は皆成功して、南國多く入貢せり。

交通

此くの如く廣大なる領土の一統せしに由り、海陸の交通大に開け、亞細亞洲内は云ふに及ばず、歐洲の商人陸路より來りて貿易し、又羅馬と使節往來せり。世祖は國の内外を



ロポコルマ

問はず廣く人材を登用し、其の丞相孛羅は即ち以太利人マルコポロなり。我が日本の富強が歐洲人に知られたるも此のポロが紹介に由れり。斯くして支那は西

西洋學術の輸入

洋の天文、數學、砲術等を輸入し、又其の活版術等を西洋に傳へたり。

元の衰亡

此の廣大隆盛の中に於て元の分裂衰亡は既に兆したり。其の一は皇族中にて世祖と大汗の位を争ふものありしより始まりて阿窩台等の四國の騷亂となり、甲に與し、乙を伐

明の太祖

ち、其の混雜一一記し難し。元來元には長子相續の慣習なき爲め、世祖の孫成宗より後は帝位相續の際常に紛争を生じ、權臣は擁立の功を恃みて專横を極め、随つて朝政紊亂す。然のみならず世祖の外征引續きし爲め、財政困難に、課税重くして人民皆怨めり。

元來漢族は蒙古の朝廷を戴くことを快しとせざりしかば、元の政益衰ふるに至り、第十一代順宗の時群雄各地に起り、天下亂れて麻の如し。中に就きて朱元璋最も士卒の心服を得、悉く群雄を平げて遂に元を亡ぼし、支那本部を一統せり、是を明の太祖とす。此の時大凡我が紀元二千年頃にして即ち南北朝の時代なり。

二十八、明の盛世、帖木兒大王 明の太祖帝位に即き、金陵(南京)に都す。太祖、宋が郡縣制度を用ひて帝室孤立せ

漢晉明と
足利氏

成祖

しに鑿み、二十餘子を要地に封じて王となし帝室の藩屏とせり。然るに藩王強傲にして幾ばくもなく内亂を醸すに至れり。此の事、漢晉及び我が足利氏と似たる所あり。太祖崩じて太孫惠帝立つ。帝、諸藩王の強大なるを恐れ、漸く之を抑へんことを謀りしかば諸王皆自ら安んぜず。燕王棣は帝の叔父にして燕京に府を開き北方を鎮せしが、兵を擧げて頻りに官軍を破り、遂に金陵に迫る。帝出でて奔り、其の行く所を知らず。燕王代り立つ、之を成祖となす。成祖、都を燕京に遷し、之を北京といひ、舊都金陵を南京といふ。

成祖雄才あり。此の時元の遺族猶蒙古に據りて明に抗せしかば、成祖之を伐ち、大に蒙古軍をオノン河邊に破りき。其の後安南地方及び南洋諸島を伐ちて又之を平げき。

義滿の交
通

帖木兒



永年中まで専ら通用せり。成祖また内治に勤め、仁宗、宣宗相繼ぎて天下よく治まれり、是を明朝の最も盛んなる時とす。



帖木兒

我が足利義滿が明と交通を始めしは太祖の時にして、後には貿易漸く盛んになり、成祖の時に鑄造せる永樂錢は多く我が國に輸入して寛先に元朝の衰へし時、察合台等の汗國も皆内亂の爲めに衰へたり。ここに成吉思汗の後裔と稱する帖木兒といふ者察合台を征服して、元亡ぶるの翌年汗位に即けり。帖木兒大志

あり、成吉思汗の志を継ぎて世界を一統せんと欲し、先づ伊
蘭を併せ、欽察國を侵し掠め、還りて印度に攻入れり。然る
に元の盛んなる時、ホラズムの舊地より追はれたる突厥族
は、此の時小亞細亞に國を建て、今の土耳其帝國の始め、帖木
兒の後ろを襲はんとする由聞こえければ、帖木兒軍を返し
て之を攻破り、悉く小亞細亞の地を略せり。

斯くて帖木兒は蒙古の恢復と、回教の宣布を名として軍
を起し、明を攻めんとせしが、途に病死せり、時に成祖の永
樂三年なり。

二十九、明の衰世、朝鮮 成祖の位を篡ひし時、宦者の先
づ内應せしを以て之を信任せしより、彼等漸く勢を得たり。
第六代英宗の世に至りて、支那には珍しからざる宦官の專
横始まりて、朝政紊亂せり。

倭寇

此の頃より明はまた外寇に苦しめり。先づ北には蒙古
の餘類なる韃靼部等ありて、屢北邊を侵ししが、後に韃靼は
佛教の一派なる喇嘛教に化せられて、侵略を止めたり。

東南の沿海地方には我が國の海賊の侵入あり。我が南
北朝の頃より南朝の遺臣西南諸國の流民と相合して、絶え
ず高麗及び元の沿海を侵し掠めたり、之を倭寇といふ。明
の太祖が我が國に使を遣したるも主として此の寇を禁せ
んことを求めしなり。然れども足利氏の力之を制するこ
と能はず、倭寇の勢益甚だしく、明人之を畏れ惡みたり。其
の船旗に皆八幡の神號を記すを以て亦之を「八幡船」といへ
り。足利氏の末世に、此の寇少しく平定したれども、殘黨は
猶臺灣に據りて、時時近海を侵せり。

斯かる間にも宦官常に權を弄して朝政腐敗し、人民は怨



王守仁

王守仁

み、盜賊は蜂起し、諸王は相繼ぎて謀叛せり。第十一代武宗の時、王守仁の如き人出でて之を平げられたれども、國力已に疲れて又振はず。王守仁、號を陽明といひ、良知の學を唱へたり。蓋し宋の朱子の學は外物の理を窮めて内を脩め、陽明は外物を假らずして吾が良知を恃むなり。後年我が中江藤樹、熊澤蕃山等が奉ずる所は此の陽明學なり。明の文學は陽明以後百年の間を最も盛んなりとす。

陽明學

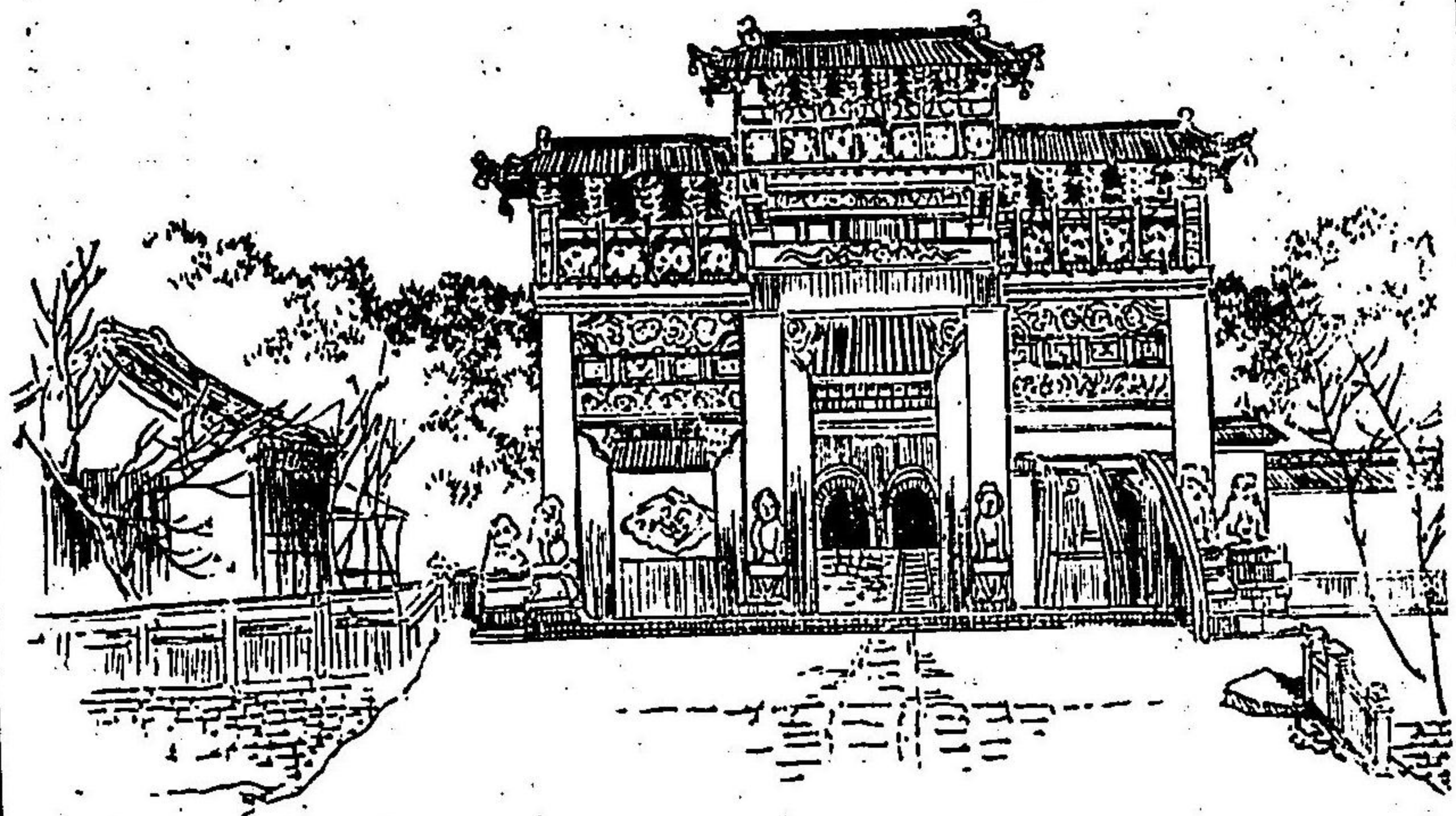
朝鮮

豐公の征韓

さて高麗は我が南北朝合一の時、李成桂王位を篡ひて國を朝鮮と號す、是今の韓室の祖なり。爾來朝鮮は明に謹み事へしが、明の第十四代神宗の時、我が豐太閤、明韓を混一せんと欲し、八道を切靡かし、明の大軍を破りき。事は本邦史に詳かなり。

三十明の末世、滿清の興起

神宗の世に恐るべき強



奉天府に於ける太祖の廟

敵更に北方に現れたり、即ち今の清朝なり。清は元と女真種の愛親覺羅部にして今の吉林の東に住みし者なり。神宗の世に其の酋長孛爾哈赤起りて四鄰の部落を併呑し、滿洲地方を一統して皇帝を稱す、是を清の太祖とす。ついで遼東を取り奉天に都し、漸く明の邊境に迫れり。太祖崩して子太宗立ち、先づ朝鮮を伐ちて之を降す。斯くして東方の憂を絶ち、又

明に助力したる内蒙古の地を平定し、其より専ら明の地を侵せり。明遂に大軍を發し、吳三桂を大將として北邊を防がしむ、時に清は世祖の代なり。

明は多年外寇に疲れしに、朝鮮の役あるに及びて國用支へ難く、鑛山を開き、課税を増し、營利の業を圖りければ、奸吏之に乗じて民の財を貪り、天下之を苦しめり。ここに於て亂民諸方に起り、李自成といふ者遂に北京を陥れければ、第十七代毅宗自殺して崩じ、自成帝と稱す。

吳三桂之を聞き、清に降り、其の援兵を得て李自成を破り、ゆくゆく内地を定む。清ここに於て北京に都す。

此の時、明の遺臣等福王を南京に擁立せしが、忽ち清將の爲めに破られ、其の他王族の擁立せらるる者相續きて皆平げられぬ。清遂に天下を保ちて、筒袖辮髮の令を強行せり。

明の遺臣

明の遺臣、清の臣民たることを快しとせざる者は往往海外に逃れたり。我が國に來りし者は朱之瑜、僧隱元、僧心越等にして、之瑜は徳川光圀の師となりたり。

鄭成功

明の遺臣の一人なる鄭成功は鄭芝龍の子にして母は我が肥前平戸の人なり。成功、明の王族を奉じて廈門に據り、進みて南京を下したれども、遂に利を失ひて臺灣に奔りぬ。當時臺灣には和蘭人占領せしを、成功悉く追ひて之に據り、又使を我が國に遣はして援兵を乞ひき。尾張紀伊、水戸の三家皆往かんことを請ひしかど、將軍家光は方に鎖國孤立の主義を取りて應ぜざりき。其の後、成功が孫の時に至りて臺灣遂に清に併せられぬ。

三十一、歐洲人の東畧、天主教の東流 元の世に歐洲との交通稍開けたりと雖も、陸路なれば不便甚だしく且

航葡人の東

西班牙人

葡人

元の末世に土耳其帝國興こりて商人を掠むること等ありて歐洲諸國之を憂ふること甚だしかりき。我が東山時代に、歐洲諸都府の商工業興りて、廣く運輸の便を開く必要に迫られ、且航海術も進歩したりしかば、葡萄牙人は遂に喜望峯を回りにて印度に至る航路を發見せり。斯くて葡萄牙人は印度に商館を置き、東に進みて暹羅支那と貿易し、天文年中我が日本に來りて貿易し、一時東洋の商權を握れり。葡萄牙人について西班牙人も東洋に來り、フィリピン群島を占領せり。豊太閤嘗てフィリピンを征服する意ありて西班牙人と交渉せしことありしが、征韓の事忙しくして果さざりき。後に西班牙人も我が國に來りて交易せり。和蘭人は稍後れて來りしかど、機敏にして漸く葡萄牙人、西班牙人の商權を奪ひ、ジャワ、スマトラ、ボルネオ、臺灣等の

南洋諸島を占領したり。(臺灣は後に鄭成功に奪はれたり)我が家光の鎖國にも蘭人のみは交易を許されて東洋の商權を握れり。山田長政が臺灣を経て暹羅に渡りて大功を立てしも寛永頃の事なり。

英人

英吉利人も亦東洋に來航せしが、彼等は西班牙人と共に、葡蘭兩國人に妨げられて我が國との交易を中止せり。然れども英人は印度に於て商權次第に伸張しつつありき。

天主教

此の貿易と共に耶蘇布教に熱心なるジエズエト派の宣教師入り來れり。我が國にては秀吉以後布教を禁じられたり。

露人

も、明朝にては彼等を重用して曆學砲術等を傳へたり。北方には露西亞人、西伯利亞平原を侵略して東に進めり。露人は先に欽察國に征服せられしが、後に欽察國の衰微に乗じて獨立せしは明の中世即ち我が東山時代なり。其よ

り次第に西伯利亞に侵入し、明の滅亡の頃には黑龍江に沿ひて滿洲の北部に侵入し來れり。

第七章 清の世

三十二、清の盛世、文藝、制度 清の世祖一統の後、聖祖

康熙帝

位に即く、年號に由りて世に康熙帝と稱す。帝の世に明の遺臣叛きて江南亂れければ、帝之を平げ、更に臺灣の鄭氏を降して其の地を併せたり。

ネルチン
スク條約

露人既に滿洲に迫りければ、帝露國に書を送り、兩國の使臣を黑龍江の上流なるネルチンスクに會して國境を議したり。時に清は頗る強硬の談判をなし、露國は讓歩して興安嶺を以て國境と定めたり。

清は太宗の時已に内蒙古を服せしが、聖祖に至りて外蒙古を定め、又西藏を平げたり。



清 聖 祖

聖祖また學を好み大に文教を興しければ、學者多く出で、字書の長たる康熙字典其の他有益なる著書多く成れり。然のみならず制度を整へ、禮樂を興し、内外善く治まれり。

乾隆帝

號に由りて乾隆帝といふ。高宗の世に天山南北路清に服し、安南、暹羅、緬甸皆入貢せり。高宗また學問を獎勵し、多く有益の書を編纂せしめたり。

清の學風

清の學風は博識を貴び、考證を重んぜり。蓋し宋以來理を究むるを貴ぶの弊は古學を講ずること疎漏臆斷に流れし故、清の學者は經學、史學、政治、故實、地理、文藝に限らず、一

清の官制

其の源に溯りて眞偽を考へ誤謬を正せり。康熙、乾隆時代には詩文の名家亦多し。此の百餘年間は恰も我が國にて水戸光圀の出でし頃より、元祿、享保の盛時を経て本居宣長の歿せし頃までに當り、東西文化の一致せし時なり。

清の官制は唐の如く吏、戶、禮、兵、刑、工の六部ありて、此の外總理各國事務衙門(略稱總理衙門)は外務を掌り、海軍衙門は海軍を掌り、理藩院は外藩を支配し、六部と共に九部にして、内閣軍機處之を統ぶ。地方の政は支那本部を十八省に分ち、省の總督は天子に直隸して文武の政を統べ、提督は軍事、巡撫は民政を分掌す。是其の大略なり。

康熙、乾隆は清朝極盛の時代にして、其の以後は國難屢生じて國運漸く衰ふ、而も其の事は多く外國事件に關せり。

三十三、莫臥兒帝國の興亡、英領印度 印度は先に

莫臥兒

金モール

帖木兒に侵入せられしより、國內亂れ小國諸方に割據して相争へり。帖木兒の子孫は中央亞細亞の舊地に於て或は興り或は仆れ、中にもバーベルといふ者阿富汗に據りて印度に攻入り、北印度を征服して莫臥兒帝國の基を開けり。其の時恰も歐洲諸國が東洋に來航を始めし頃なりき。其の後子孫相繼ぎて、我が元祿の頃遂に印度の全土を一統せり。我が國にては之をモゴルと呼び、又モールと訛り、金モール、銀モールなどいふ名は是より出でたり。

莫臥兒帝國一統の後幾ばくもなく其の政衰へて、國內分裂し、諸侯割據の有様となれり。既に云へる如く歐洲人は續續と印度に來りて貿易を營み、中にも英國人は東印度會社を設立し、マドラスを根據として盛んに通商しつつあり。然るに印度騷亂の爲めに英國の貿易大損害を受けし故、東

英國の印度征服

緬甸征服

印度會社は土地を占領して貿易の安全を圖らんとせり。ここに佛國も亦印度會社を起こして、印度に通商し、英國と商權を争ひ、又地方の侵略に於ても競争を起こしたり。英國東印度會社の書記クライブ善く戰ひて大に佛軍を破り、益諸方を侵略して殆ど恒河地方の全權を握り、遂に其の地の總督に任せられたり。其の後任へスチング益土地を廣めて印度全國遂に英國に歸せり、此の時恰も我が舊幕の末にして米國のペルリ來朝の頃なり。斯くて英國は東印度會社の政權を收めて政府に移し、英國女王は印度皇帝の位に登れり。

印度に次ぎて緬甸も亦英國に亡ぼされ、印度の屬州となれり。是等は極めて近年の事なれども、今序でを以てここに記すなり。

三十四、鴉片戰爭、長髮賊、英佛聯合軍 英國は印度に勢を張ると共に又支那の貿易を擴張せり。然れども其の貿易品は主として印度の鴉片なりしかば、清國政府は鴉片の人民を害するを憂へ、輸入禁止を務めしも効なかりき。第八代宣宗即ち道光帝の時兩廣(廣東廣西)總督林則徐は英商所有の鴉片二萬餘函を焼き、爾後賣買する者は死刑にせんと布告せり。

ここに於て英國は軍艦を發して廣東、香港等沿海の要地を占領し、遂に鎮江を取り、南京に迫れり。清遂に和を乞ひ、償金二千六百萬兩を出だし、廣東、上海等の五要港を開き、又香港を割讓したり。時に我が天保十三年なり。

乾隆の外征より國庫乏しく、課税重く然のみならず兩廣に飢饉ありて人民窮せしかば、鴉片戰爭の後政府の威勢衰

ふるに乗じて叛亂大に起これり。廣西の人洪秀全耶蘇教に託して愚民を惑はし、兵を擧げて諸方を攻取り、遂に南京に據りて自ら天皇と稱せり。其の徒皆滿洲政府を覆すと唱へ、剃頭を廢して髮を蓄ふる故之を長髮賊といふ。曾國藩義兵を起し官軍稍振ふと雖も、賊の勢猶盛んなり。

此の叛亂の中に更に一事件起これり。そは清國の官吏が英國の國旗を立てたる商船中に推入りて罪人を逮捕したると、清人が佛國宣教師を殺したるとに由り、兩國軍聯合して廣東を陥れ、更に北に上りて天津に迫る。清政府兩國と和を媾せしが、翌年其の條約批准交換の爲めに來れる使節を砲撃せしより、事再び破れて兩國聯合軍は遂に天津、北京を陥れたり。露國公使イグナチエフ其の間に周旋して和議又成り、清國は償金千二百萬兩を出し、牛莊等の七港を

三十四、鴉片戦争、長髮賊、英佛聯合軍 英國は印度に勢を張ると共に又支那の貿易を擴張せり。然れども其の貿易品は主として印度の鴉片なりしかば、清國政府は鴉片の人民を害するを憂へ、輸入禁止を務めしも効なかりき。第八代宣宗即ち道光帝の時兩廣(廣東廣西)總督林則徐は英商所有の鴉片二萬餘函を焼き、爾後賣買する者は死刑にせんと布告せり。

ここに於て英國は軍艦を發して廣東、香港等沿海の要地を占領し、遂に鎮江を取り、南京に迫れり。清遂に和を乞ひ、償金二千六百萬兩を出だし、廣東、上海等の五要港を開き、又香港を割譲したり。時に我が天保十三年なり。

乾隆の外征より國庫乏しく、課税重く然のみならず兩廣に飢饉ありて人民窮せしかば、鴉片戦争の後政府の威勢衰

ふるに乗じて叛亂大に起これり。廣西の人洪秀全ホンシュウケン耶蘇教に託して愚民を惑はし、兵を擧げて諸方を攻取り、遂に南京に據りて自ら天皇と稱せり。其の徒皆滿洲政府を覆すと唱へ、剃頭を廢して髮を蓄ふる故之を長髮賊といふ。曾國藩義兵を起こし官軍稍振ふと雖も、賊の勢猶盛んなり。

此の叛亂の中に更に一事件起これり。そは清國の官吏が英國の國旗を立てたる商船中に推入りて罪人を逮捕したると、清人が佛國宣教師を殺したるとに由り、兩國軍聯合して廣東を陥れ、更に北に上りて天津に迫る。清政府兩國と和を媾せしが、翌年其の條約批准交換の爲めに來れる使節を砲撃せしより、事再び破れて兩國聯合軍は遂に天津、北京を陥れたり。露國公使イグナチエフ其の間に周旋して和議又成り、清國は償金千二百萬兩を出し、牛莊等の七港を

開き、其の他猶種種の條約を結べり。



李 斯くて外事落著せしかば、官軍の諸將李鴻章、左宗棠等會國藩を助けて専ら長髮賊を討ち、又英將ゴルドン等を備ひ、銃隊を組織して賊を攻めければ、南京遂に陥り、秀全自殺し、長髮賊平きぬ。時に

我が元治元年にして長州が外國と交戦せし頃なり。
三十五、露人の東畧、清佛事件 長髮賊の亂中に英佛事件のみならず、露國とも又一事件を生ぜり。ネルチンスクの條約後露國は猶侵略を怠らず、清國の防備弛ゆるに乗じて黒龍江口を占領し、ニコライスクを立てて根據地とし、

愛珞條約

新に境界を定めんことを清に迫れり。清は方に長髮賊の亂に苦しみて之を拒むこと能はず、遂に黒龍江上の愛珞に會して黒龍江以北の地を悉く露國に與へたり。

浦潮斯德

此の年英佛聯合軍北京を陥るるの事あるや、露國公使其間に周旋して和議を成せり。露國は其の報酬として清に迫りて烏蘇里江東の地を讓與せしめたり。露國はここに浦潮斯德を立てて東方の根據地とせり。

露國の樺太領有

是より先、露國は滿洲を侵略すると共に、我が樺太の事業未だ擧らざるに乗じて其の北部を占領し、我が國人との紛争常に絶えざりき。明治八年遂に千島と交換の議調ひて樺太全島を得たり。此の年清の今帝載湉立つ、年號に由りて光緒帝といふ、清朝第十一代の天子なり。

光緒帝 露國の中亞細亞領有

中亞細亞は帖木兒の死後分裂興亡絶えざりき。露國は

伊犁事件

遂に是等の小汗國を併呑し、光緒帝即位の頃には全くアム河以北の地を領せり。ここに於て露國は清領の伊犁と境を接するに至りしが、會伊犁地方に回教徒の亂あるに乗じて露國は伊犁を占領せり。亂



光緒皇帝

平ぐに及びて清國は伊犁の還附を請求せしも、議久しく決せず。清國は遂に一部の土地と償金とを露國に與へて局を結べり。

清佛事件

其の後清は安南の事に由りて佛國と交戦せり。初め安南に内亂ありしを、佛國の助けに由りて一統せしが、亂平ぎて後、安南王前約を履行せざりしかば、佛國は遂に柴棍を占領せり。安南王已むを得ず、地を割きて和議を講じき。

佛國の安南領有

幾ばくもなく、安南は佛國の專横を憤りて交戦せしが、戦敗れて東京地方を讓與し、且佛國の保護國とならんことを約せり。然れども安南王は清國の封冊を受けしを以て清國は此の約に付きて異議を唱へ、遂に戦端を開きたり。佛將クールペー海軍を督して戦ひしが、クールペー病死し、佛國の輿論も戦を好まざりしかば、兩國互に讓歩して和議を結び、佛國は償金を要求せず、清國は安南の主權を棄てたり。ここに於て安南地方全く佛國の手に歸したり。

三十六日清韓の關係、日清の役 支那は歴代自ら尊大にして自國を中華と稱し、外國を夷狄と輕蔑しければ、近年に至りても世の文明に競ふことを欲せず、自然に世界の

我が琉球
合併

日清事件

く満清に離れんとして而して自ら覺らざりき。

琉球は昔より自ら日支兩屬と稱して兩國に朝貢せしが、
其の國人嘗て臺灣人の害を被りし時我が國之を保護して、
明治七年臺灣を征伐し、結局清國をして償金を出さしめたることは本邦史に委し。是等の歴史上の事實あるを以て、
我が國は清國の異議あるにも拘らず琉球王國を廢して、沖繩縣となせり。清國は之に



李

由りて大に感情を害せり。

朝鮮は先に清に服せしよ

り世世其の封冊を受けたり。

熙

今帝李熙の實父大院君一時

國政を執りしが甚だ外國を嫌ひて通好を喜ばず、我が國

の軍艦を砲撃するに及び、我は其の罪を問ひ、遂に通商條約を締結して釜山、元山、仁川の三港を開かしめたり。爾來我が國は朝鮮を導きて、獨立の實を擧げしめ、以て東洋の安寧を保たんことを謀りしに、清國は之を喜ばず、遂に二十七八年日清の戦役となりて清國の失敗に歸せしことは亦本邦史に委し。是に由りて朝鮮は全く獨立を認められ、王は皇帝と稱し、國を韓と號せり。

日清役の後、清國人も大に悟る所あり、我が國を手本として、政事を改革し、文明の事業を興し、相携へて東洋の平和を保たんと欲する者あり。光緒帝聰明にして大に康有爲を用ひ、斷然改革を行はんとせしに、事甚だ急進にして、皇太后及び滿洲大臣等の意に逆ひ、帝は殆ど幽閉せられ、康有爲は外國に逃れぬ。

康有爲

三十七、義和團事件 日清の役に馬關條約の締結せらるる時、李鴻章は密かに露國に結びて謀る所あり。ここに於て、露、獨、佛三國同盟の干渉となり、遂に我が國の手より遼東半島を取返すことを得たり。然るに幾ばくもなく三國は其の恩威を利用して露國は遼東の旅順口、大連灣を借地し、獨逸は山東省の膠州灣を借地し、佛國は廣東省の廣州灣を借地し、名は借地にして實は占領なり。英國も亦權力平均の爲めに威海衛を借用せり。列強國は其の他猶種種の要求をなし、鐵道、鑛山等の利益を取占め、獨佛等の宣教師は清國人を虐待せり。

是より先、清國には義和團といふ團體あり、一種の拳術を教授し、此の術を習ふ者砲丸も身を傷ること能はずと迷信せり。皇族端郡王及び滿洲大臣等の攘夷論者は密かに彼

滿洲特約
事件

等を保護獎勵して他日攘夷の爲めにせんとせり。我が明治三十三年團徒の一部は外人の壓制に堪へずして北清地方及び滿洲に起こり、教堂を焼き鐵道を破り、外人を追ひ、遂に北京の各國公使館を圍めり。各國救援の兵を出すも道遠くして大兵急に應ずるに足らず。因りて我が軍主力となり、各國の兵と聯合して、太沽、天津を破り、遂に北京を陥れて各國公使を救援しき。此の事亦本邦史に委し。皇帝、太后は難を西安府に避けたり、即ち古への長安なり。

北京には皇族慶親王及び李鴻章等全權大臣として各國公使と媾和を議し、償金四億餘萬兩を出し、太沽、天津の兵備を撤する等の諸事を約し、翌年和議成れり。皇帝、太后は北京に還幸せり。

此の亂に露國は自國の鐵道等を保護すと稱し、兵を出し

て滿洲を占領せり。亂平きて後露國は敢て兵を撤せず、密かに清國に迫りて滿洲に於ける特權を得んとせり。我が國之を抗議して其の議一時止みぬ。既にして露國は前議を修正して再び提出せしに、劉坤一、張之洞等奏して之を拒絶せり。然れども露國は今後いかなる手段を取りて素志を貫かんとするか未だ知るべからず。

三十八、總括 上の諸章に於て東洋諸國各時代の景況

を述べたり。今之を一層明瞭ならしめん爲めに、國別に主要なる事實を略記し、且前に言殘したる點を補ふべし。

(一) 支那の内地は黃帝一統の後、唐、虞、三代、周、秦、漢、三國、晉、南北朝、隋、唐、五代、宋、元、明及び清相繼ぎて之を治めたり。其中、南北朝の北朝、宋代の遼、金、及び元と清等の外は皆漢族の朝なり。漢族、北方夷族に壓迫せらるる時は江南に移るを

常とす。

(二) 韓土は初め箕氏の古朝鮮と南部の三韓とに分れ、次に新羅、高麗、百濟の三國となり、百濟、高麗が唐に亡ぼされたる後、新羅殆ど半島を一統し、王氏之に代りて高麗と號し、李氏之に代りて朝鮮と號し、近年改稱して韓といふ。此の間大抵皆支那に朝貢せり。

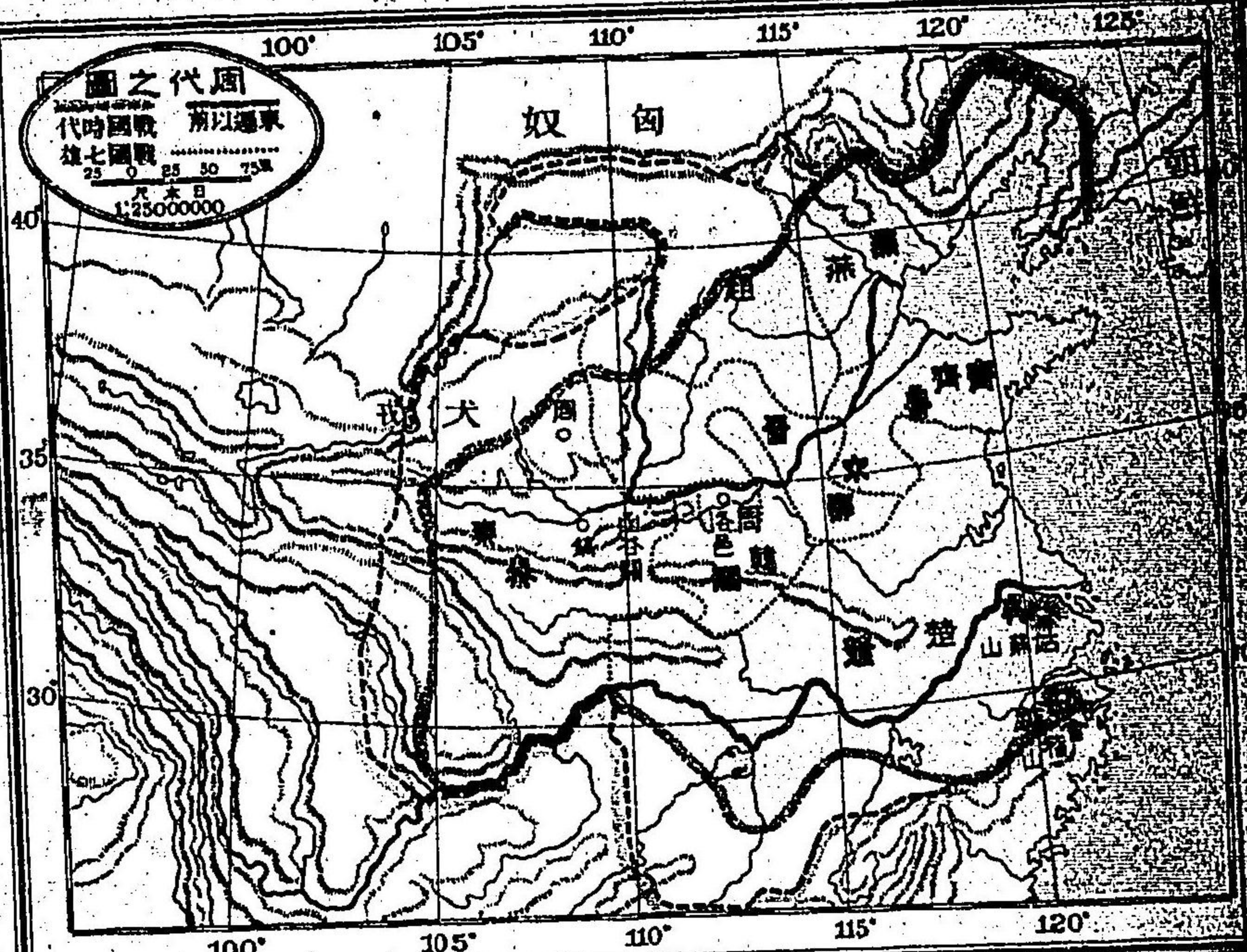
(三) 今の蒙古地方は北方夷族の消長する地なり。北方夷族には土耳其族、通古斯族、蒙古族等ありて更に多くの小種族に分かれ部落を成せり。其の中、一時北方に蔓延して雄と稱せる種族の著明なる者を擧ぐれば、秦漢時代の匈奴、漢末より晋代の鮮卑(第十節、及び十二節參看)唐代の突厥、より契丹、女真、蒙古、滿清等なり。以上突厥の外は何れも東邊より興れる者なり。彼等は常に中國の患へをなし、志を得れ

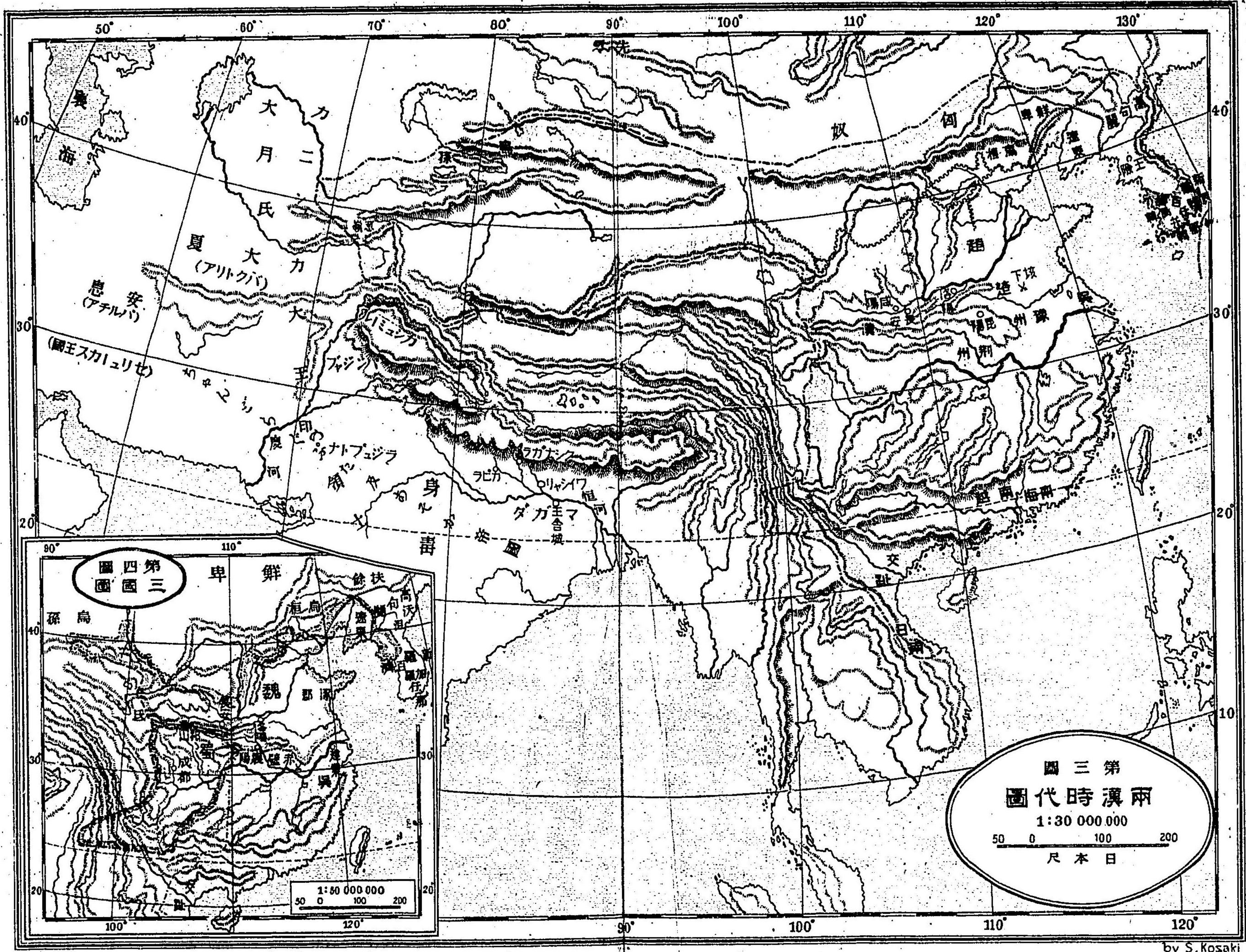
ば、中國に據り、敗るれば多くは西に移る。(十、十二、二十五節等)
 (四) 中亞細亞は東西諸國の衝路に當る故か、興亡甚だ繁し。其の中著明なる者をいへば、嘗て匈奴地方より來れる月氏國に領せられ(八節)、後に突厥に併せられ、大食帝國に併せられ(十六節)、西遼となり(二十五、二十六節)、蒙古の察合台國となり、帖木兒帝國となり、後に分裂して今は露國の領地たり。
 (五) 西亞細亞は小亞細亞、亞拉比亞より印度河に至る地方にして我が紀元初年の波斯帝國、次に歷山帝國(五節)、大食帝國(十六節)、突厥族より興れるセルヂユク帝國(二十五節)、蒙古帝國の伊兒汗國等の大國は皆此の地方に興れり。今は波斯、阿富汗徒らに邦國の名ありと雖も、英露二國の勢力の下に在り、唯二國互に相妨ぐるに由りて僅かに亡びざるを得るのみ。

(六) 印度は古へより小國分立の國なり。偶阿輸迦王の如き威力ある者なきに非ざれども、要するに統一の歴史なし。佛教一たび流布して後、我が平安遷都の頃、婆羅門教の變形なる印度教興りて、佛教衰替し、セルヂユク帝國の侵入後は回教徒亦蔓延し、莫臥兒帝國一統の後、忽ち又分裂して歐洲人侵入の時代となり、遂に英國に領有せられぬ。

(七) 後印度の内、安南、暹羅の土人は上古支那内地に蔓延せし苗族にして、緬甸の土人は西藏族なり。此の地方は北方夷族の如く内地の患へをなすこと多からず、また韓土の如く朝貢連續せず、唯内地強盛の時、時時服従するのみ。近來安南は佛國の手に歸し、緬甸は英國の領地となり、暹羅其の間、に在りて猶兩國の爪牙を免るる者は亦兩國が互に相妨ぐればなり。

此くの如く東洋諸國は常に他の種族に侵入せられ、或は外國の勢力の下に屈し、興亡變遷定まりなきに、獨り我が日本古へより他國の馬蹄に汚されず、萬世一系の帝室を戴きて、日清戰役以來は漸く大陸諸國の事に干涉するに至れり。



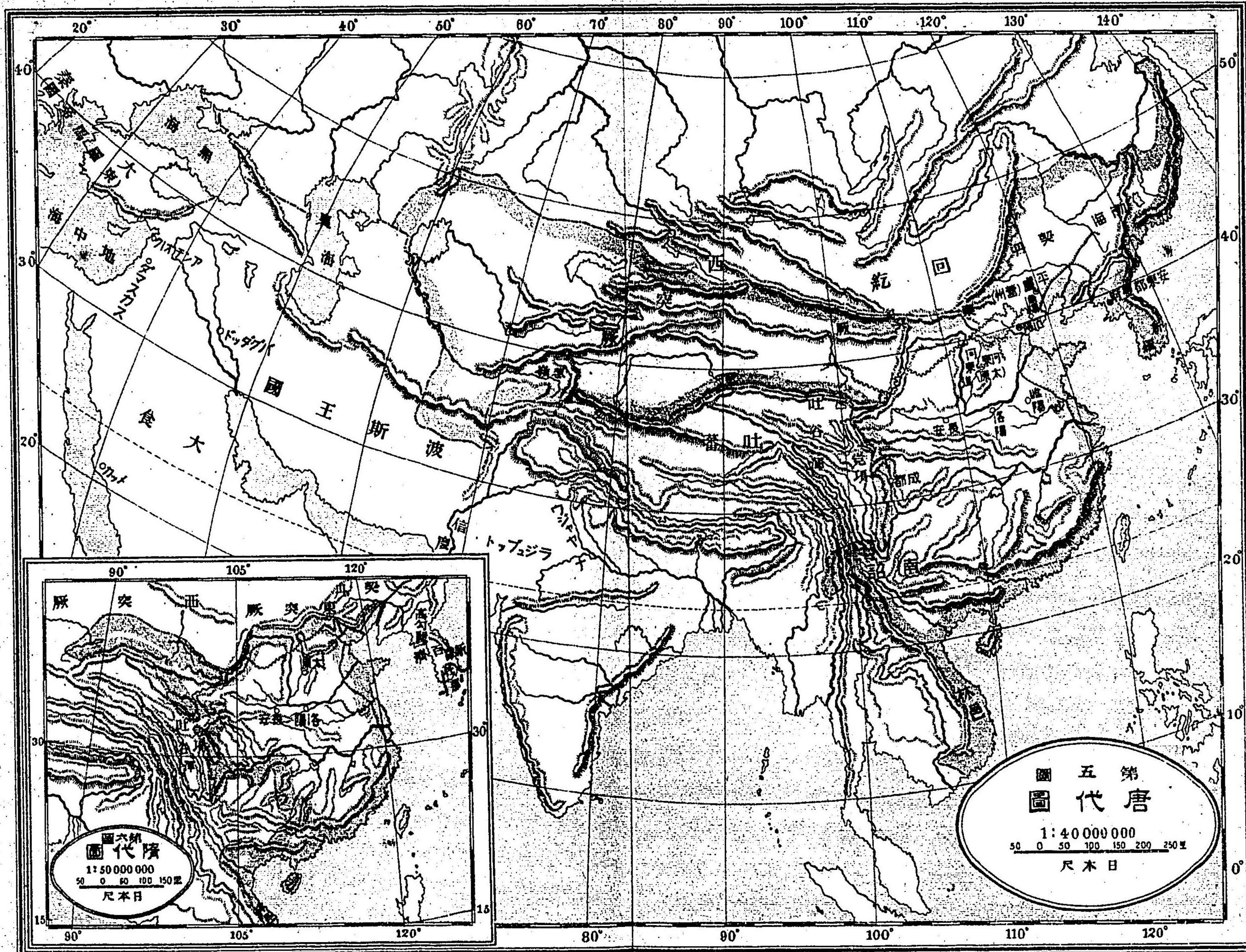


第三圖
第四圖

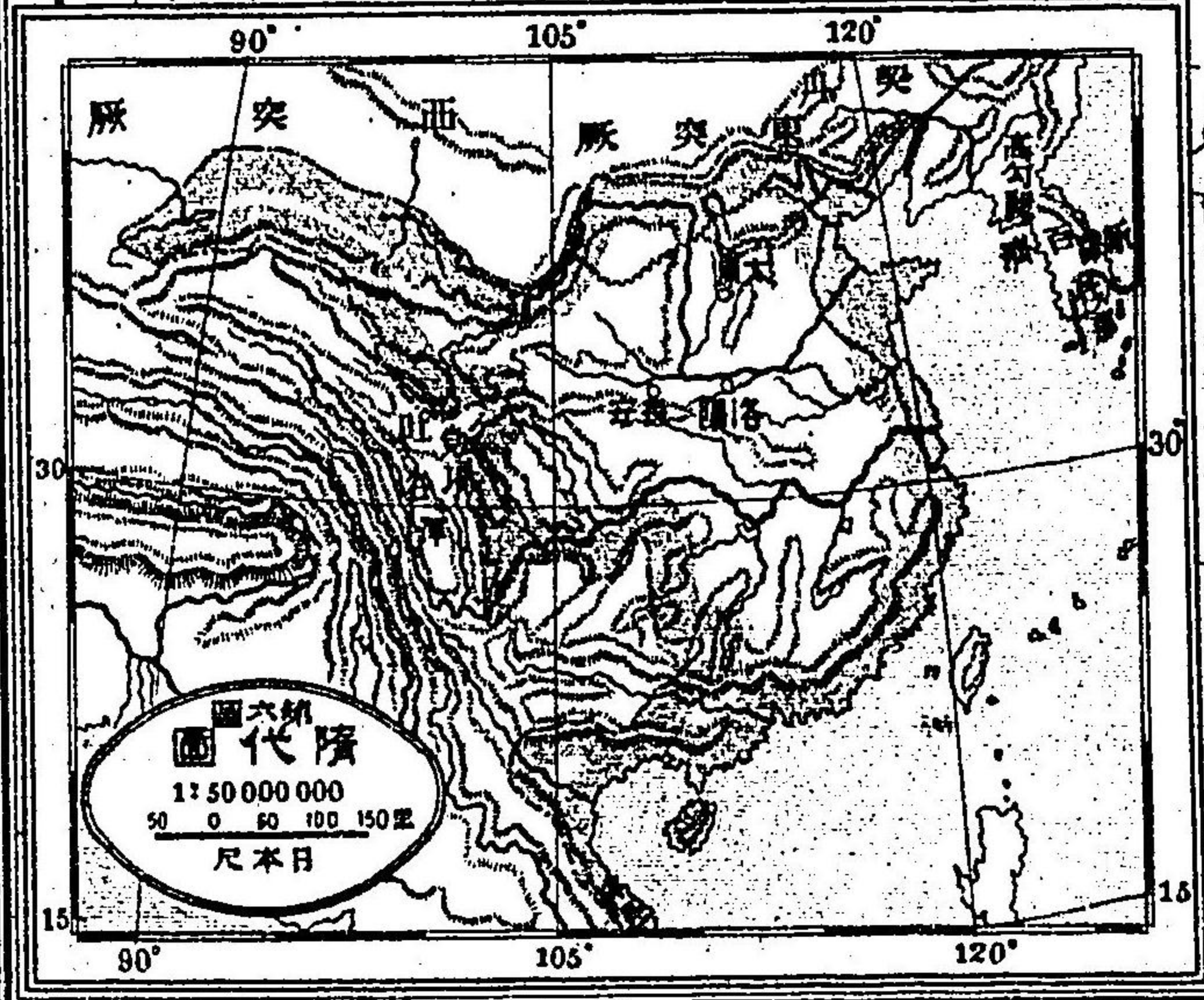
第三圖
兩漢時代
1:30 000 000
50 0 100 200
尺本日

1:50 000 000
50 0 100 200

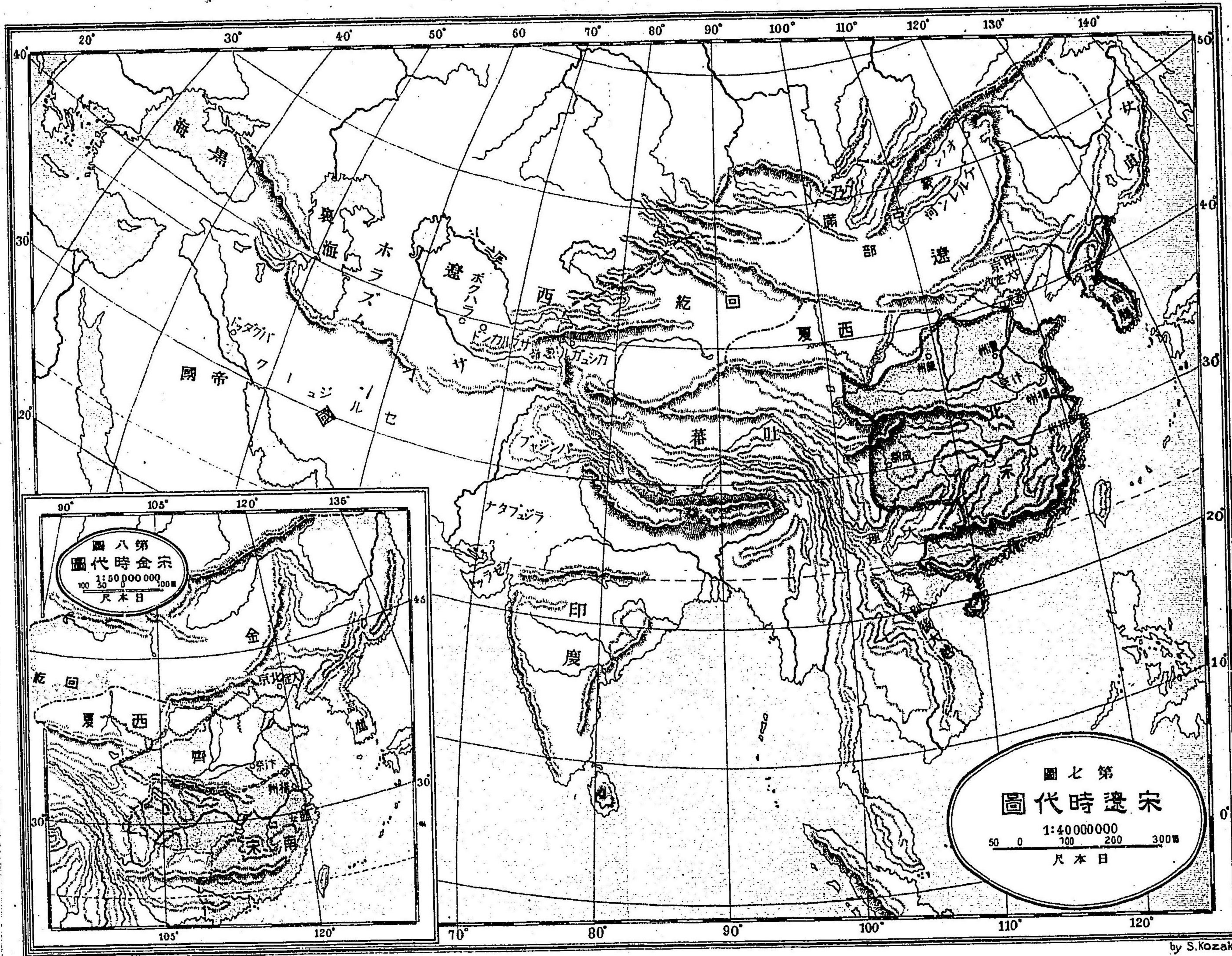
by S. Kosaki



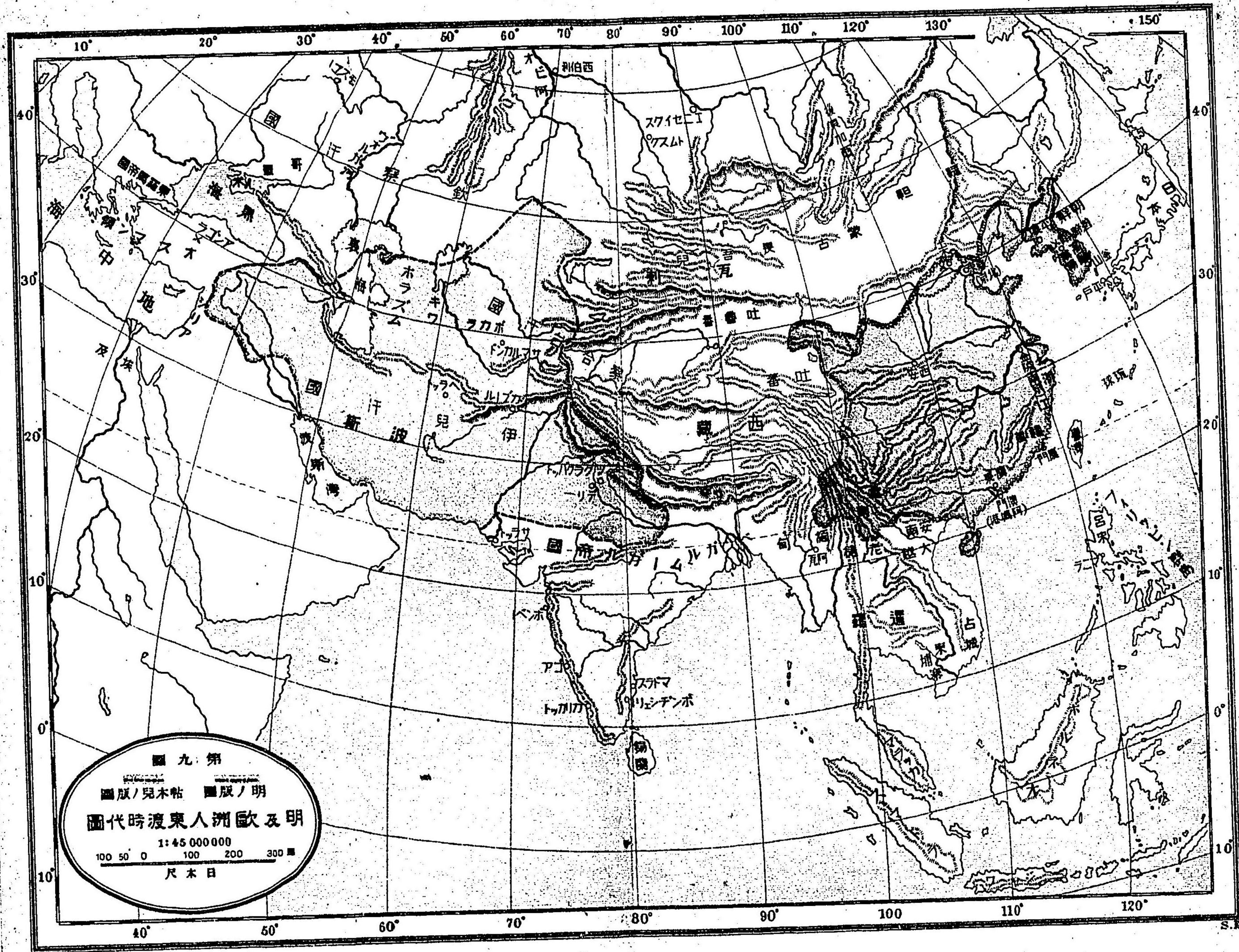
第五圖
唐代圖
1:40 000 000
50 0 50 100 150 200 250 里
尺本日



第六圖
隋代圖
1:50 000 000
50 0 50 100 150 里
尺本日



by S.Kozaki

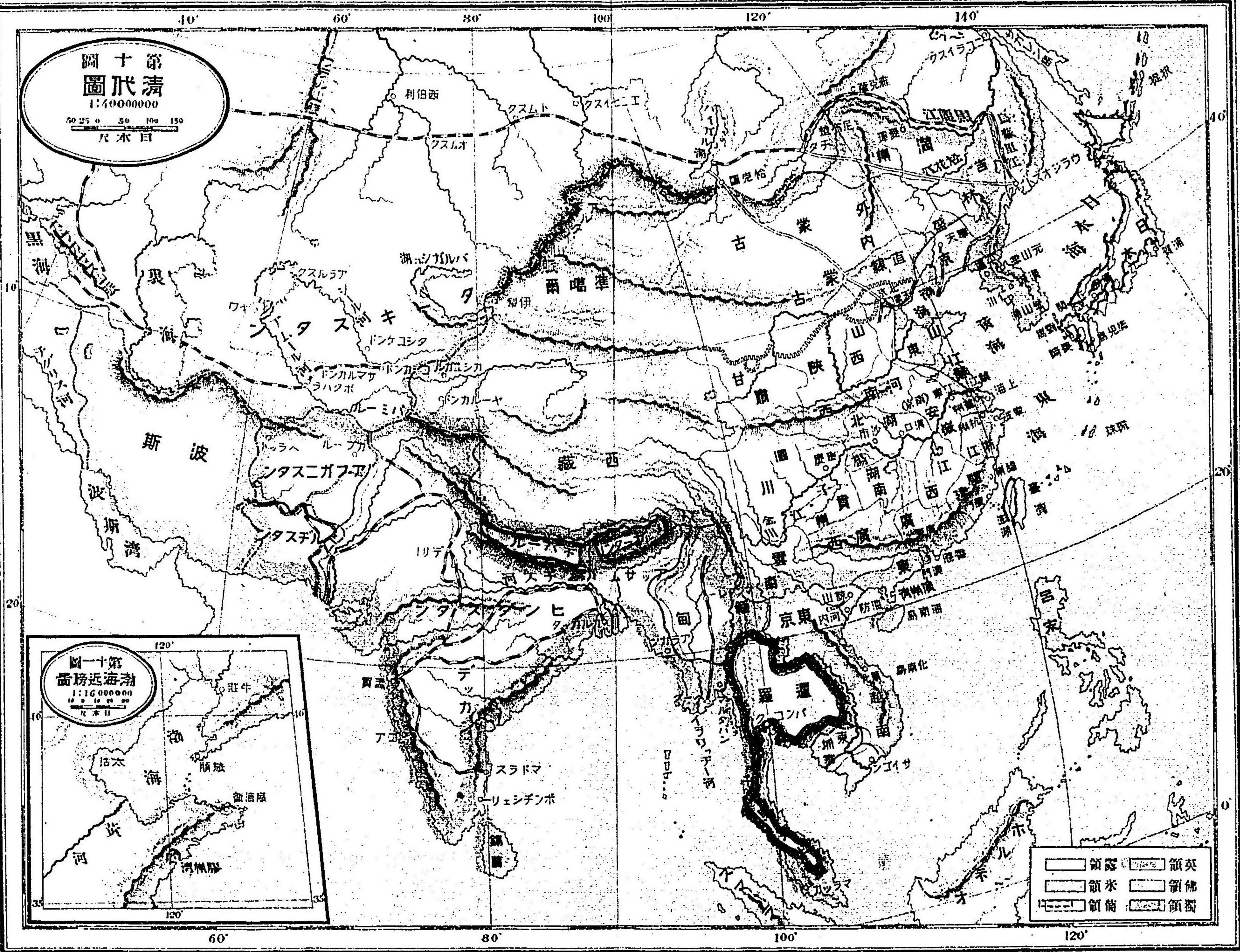


第九圖
 明版ノ明 明版ノ明
 明及歐人東渡時代圖
 1:45 000 000
 100 50 0 100 200 300 尺本日

第十圖
清代圖

1:4000000

50 25 0 50 100 150
尺本目



第十圖
南洋近海圖

1:1600000

50 25 0 50 100 150
尺本目

- 領露
- 領英
- 領法
- 領德
- 領荷

歷朝年代略表

周	殷	夏	舜	堯	黃帝	神農	伏羲	歷朝
四六二	一一二四	一五四七	一六〇八	一七〇六	二〇三八	二二七八	紀元前 二二九三	始めて帝と稱せし年(日本紀元)
三七	三〇	一七	一	一				代數
八六七	六四四	四五八	六一	九八				年數
齊	宋	晉	(吳)	(蜀漢)	魏	漢	秦	歷朝
一一三九	一〇八〇	九二五	八八二	八八一	八八〇	四五九	紀元後 四一五	始めて帝と稱せし年(日本紀元)
七	八	一五	四	二	五	二六	三	代數
二四	六〇	一五六	五九	四三	四六	四二一	一五	年數

後梁	唐	隋	(北齊)	(北周)	(東魏)	(西魏)	(後魏)	陳	梁
一五六七	一二七八	一二四九	一一一〇	一一一七	一一九四	一一九五	一〇四六	一一二七	一一六二
二	二二	四	六	五	一	四	九	五	四
一七	二九〇	三八	二八	二五	一五	二五	一四九	三三	五六
清	明	元	金	遼	宋	後周	後漢	後晉	後唐
二三七八	二〇二八	一八六六	一七七五	一五七六	一六二〇	一六一一	一六〇七	一五九六	一五八三
	一七	一一	九	九	一八	三	二	二	四
	二七七	八九	一一〇	二〇七	三三〇	一〇	四	一一	一四

百年表

本表は年代の記憶に便せん各世紀の境界に最も近き著名なる事件を擧ぐ(日本紀元)

紀元前	紀元	紀元	紀元	紀元	紀元	紀元	紀元	紀元	紀元
二千年頃	一千年頃	一千年頃	九百年頃	八百年頃	七百年頃	六百年頃	五百年頃	四百年頃	三百年頃
黄帝の世	夏亡ぶ	周の東遷	齊の桓公覇となる	老子、孔子、釋迦の三聖生まる	戦國の初め	孟子時代 阿輪迦王時代	周亡ぶ	漢の文帝勤儉の世	楊太真貴妃となる
同宣帝中興の世	後漢光武帝の世	後漢の衰世 鮮卑漸く強盛	孔明卒す 三韓日本に服従す	五胡の亂	南北朝の宋代	同梁代	唐の太宗の世		
六百年頃	七百年頃	八百年頃	九百年頃	一千年頃	一千一百年頃	一千二百年頃	一千三百年頃	一千四百年頃	一千五百年頃

一千五百年頃	白居易、韓愈、柳公權時代	二千一百年頃	明の英宗の世衰世の初め
一千六百年頃	五代の世 高麗王氏建國	二千二百年頃	王守仁卒す 葡人支那沿海に貿易を初む
一千七百年頃	宋の仁宗の世 セルデユクの盛世	二千三百年頃	李自成の亂
一千八百年頃	南京の初め	二千四百年頃	乾隆年間
一千九百年頃	成吉思汗崩す	二千五百年頃	鴉片戦争
二千年頃	元の末世 朱元璋兵を起す		

明治三十五年一月十日印刷
 明治三十五年一月十五日發行

女子東洋小史

定價金四拾

著 者 新 保 磐 次

印 發 者 兼 刷 行 者 兼 金 港 堂 書 籍 株 式 會 社

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

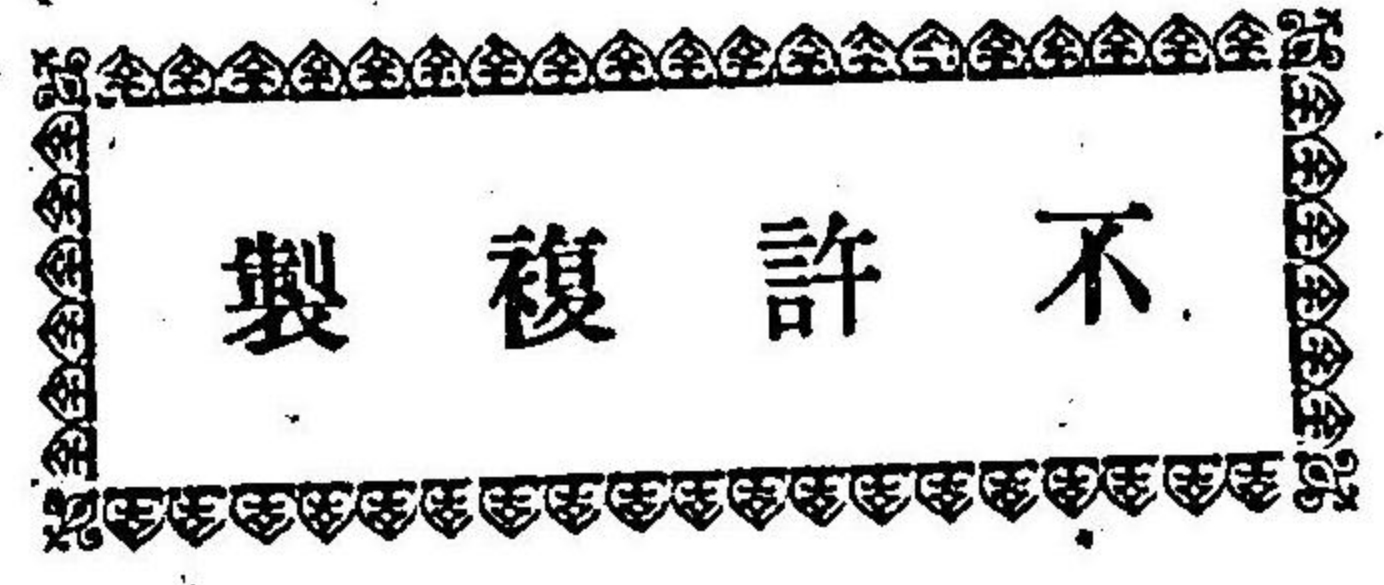
代 表 者 右 社 長 原 亮 一 郎

東京市平谷區龍泉寺町四百十四番地

印 刷 所 會 社 東 京 國 文 社

東京市京橋區宗十郎町十五番地

賣 捌 所 各 府 縣 特 約 賣 捌 所



高等女學校教科用圖書

湯原元一氏◎育教聖諭教本女子用全一冊 定價金參拾五錢

吉田彌平、篠田利英氏◎小島政吉、岡田正美國語讀本全十冊 定價各金貳拾五錢

武田錦子氏◎子女英語讀本全四冊 定價金壹圓六拾錢

新保磐次氏◎子女日本小史全二冊 定價上金四拾錢 下金五拾錢

新保磐次氏◎子女東洋小史全一冊 定價金五拾五錢

新保磐次氏◎子女西洋小史全一冊 定價金六拾錢

寺尾捨次郎氏◎有坂幾造氏算術教科書全二冊 定價金壹圓四拾五錢

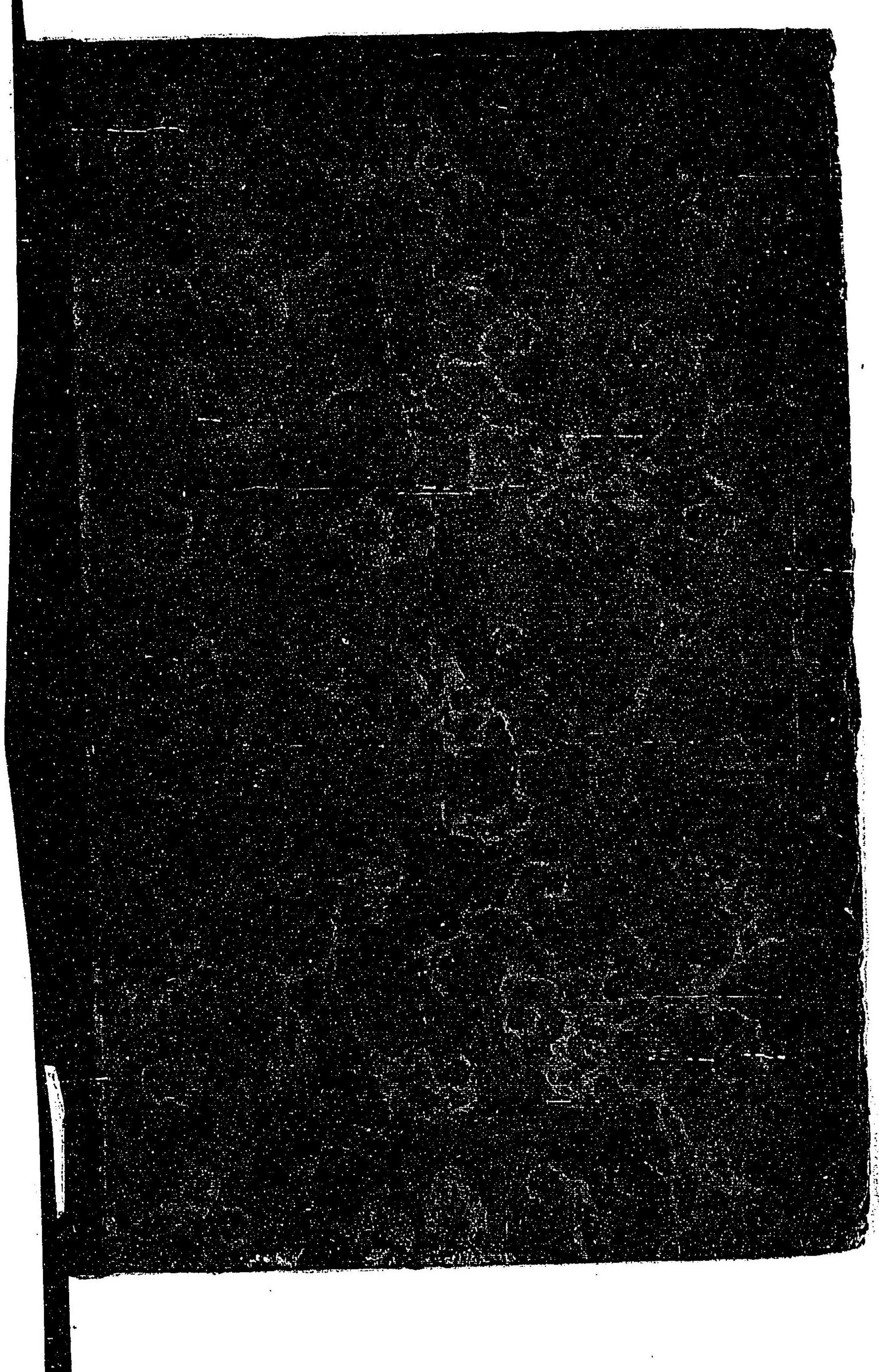
寺尾捨次郎氏◎能勢賴俊氏理科教科書全二冊 定價金七拾參錢

荒木十畝氏◎子女毛筆畫帖全八冊 定價金壹圓六拾六錢

下田歌子氏◎新撰家政學全二冊 定價金九拾五錢

塚本はま子氏◎家事教本全一冊 定價金七拾錢

93
82



003372-000-4

93-82

東洋小史 (女子)

新保 磐次 / 著

M35

ACC-1880

